
或る戦艦と艦長 2

E F 1 2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る戦艦と艦長2

【Nコード】

N7540V

【作者名】

EF12

【あらすじ】

ガトランチス（白色彗星）帝国戦とイスカンダル救援作戦で奮闘した地球防衛軍所属の戦艦『相模』だが、その巨体を休める暇はない。

新たな敵、暗黒星団ことデザリウム帝国の侵略の魔手が地球に迫っていたのだ――。

プロローグ (前書き)

“残念美女”達の新たな戦いが始まります。

本格的な連載は、拙作『或る戦艦と艦長』完結後にスタートします。

プロローグ

——無限に広がる大宇宙——。

全ての始まりとも言う“ビッグバン”から約150億年。数多の星が生まれ、消えていった。

それはまさしく生命の営みにも似ている。

億年単位で進む星の生涯に比べれば、人間の営みなどまさに一瞬の光芒にも満たない。

しかし、その一瞬の光芒のごとき人の生命にもまた、輝きと煌めきがある——。

ガミラス、ガトランチスの侵略を何とか跳ね返した地球は、太陽系のみならず近隣恒星系にも開発の手を伸ばし、侵略・絶滅戦争の痛手を取り越えて立ち上がろうとしていた。

近隣恒星系への進出は単に資源の確保のみならず、人類の新天地探しや、新たな侵略に備えた警戒拠点作りも兼ねていたが、予想もしない手で侵略の魔手が伸びつつあることを、人類はまだ知る由がなかった。

また、地球とは別次元の世界に本部が存在する汎世界規模の治安・司法維持組織ともいうべき一大組織、時空管理局は、魔法による世界平和の構築と維持を掲げて活躍してきたが、成立から100年を経ずして、早くも行き詰まりを見せ始めていた。

さらに、魔法戦力を見戯のごとくあしらう強力かつ凶悪な軍事勢力や国家との遭遇で、管理局はジワジワとその力を削がれ始めていた——。

第188話『第7艦隊』（前書き）

こちらの本編もスタートです。

第188話『第7艦隊』

——地球防衛軍本部、司令長官執務室——

執務室には主たる藤堂平九郎と前任参謀の古代守、長官付秘書官の森雪の他、2人の壮年の男がいた。

「——山南良介、第7艦隊司令官を命ずる」

「はっ」

「ジェイムス・モーリー、第7艦隊参謀長を命じる」

「拝命致します」

藤堂から呼ばれた2人、山南とモーリーは敬礼の後、それぞれの辞令を受け取った。

——山南は沖田・土方の2期後輩にあたり、直前まで宇宙戦士訓練学校の日本校にて校長を務めていた人物。

モーリーはアメリカ出身で51歳の黒人。

白色彗星帝国戦においては第2外周艦隊副司令官職にあり、首脳陣を失いつて半ば壊滅した第2・第5外周艦隊を再編してガニメデ基地まで撤退を果たした人物だ。

藤堂は全員を着席させる。

「第7艦隊は実験部隊とも言うべき艦隊だ。

旗艦たる『マルス』と新造艦『アリゾナ』『モンタナ』に『海鳴』

『タコマ』、自動制御の戦艦・駆逐艦を中核に、旧白色彗星帝国軍からの編入艦を運用してもらう。

——何分にも初めてづくしの艦隊だ。それゆえ、君達に任せたいの

だ」

「――わかりました。全力を尽くします」

山南が微笑を浮かべて応じた。

子供が見たら泣き出しそうないかつい顔立ちなのが実に残念だった
が――。

――アステロイドベルト付近、『相模』艦橋――

『いつまでも真っ直ぐ飛んでるんじゃない！どうぞ撃墜して下さい
と言ってるようなもんだぞ！！』

モニタースピーカーからは山本の怒号が響く。

――アルファ星系の第1次探査を終えた13TFは、第2次探査隊
出発までの間を輸送船団護衛と太陽系内の哨戒を行っているが、そ
の合間にイカルス付近に立ち寄り、『ヤマト』配属予定の新人パイ
ロット達のアグレッサ―任務にもつく。

本日の訓練メニューは小惑星帯内の機動だ。

『四郎！そんなこっちゃ、いつまで経っても兄貴が成仏せんぞっ！
！。』

坂本！貴様ら、ヒナ共に何を教えてた！！？』

『――はいっ！！』

『すいません！』

山本の容赦ないダメ出しは新人のリーダーである亡き僚友の弟のみ

ならず、彼らを教えた坂本茂にも及ぶ。

「絞られてますね、ヒナ鳥達のみならず、坂本達も」

「……『ヤマト』戦闘機隊の名の重さは、山本が一番よく知っているからな。」

坂本達にとってもいい復習だろう」

感嘆の声を上げる大村に冴子が応じる。

『ヤマト』が不撓不屈の艦である以上、戦闘機隊もまた不屈であることを求められる。

亡き加藤三郎と共にヤマト戦闘機隊を支え、唯一生還した山本とすれば、坂本や加藤四郎達は期待の後輩だ。散っていった仲間達の思いを継ぎ、立派なファイターパイロット、否、宇宙戦士に育ってほしいという思いは人一倍だ。

——『鳥海』艦橋——

山本に扱かれる坂本、加藤四郎達を見ながら、艦長席のフランベルク・棗・シルヴィアはぼつりと呟く。

「——頑張れ、弟達……」

それは“沖田の子供達”共通の思いでもあるが、すぐに気分を切り換える事になった。

「艦長、間もなく対空戦闘機動演習です」

「オッケー。アリア、準備できてるわね？」

「ええ、いつでも」

通信士からの連絡を受けたシルヴィアが舵を預かる副長のフランベルク・白百合・アリアに確認をとると、双子の妹は不敵な笑みを返してきた。

そう、アリアはアクロバティックな操艦にかけては地球防衛艦隊屈指の操舵士なのだ。
そして、アリアに負けず劣らずの過激な操舵士が僚艦にいた。

——『水無瀬』艦橋——

「これより対空戦闘演習に入る。新人相手とはいえ、手加減なしで行くわよ!!」

「「はいっ!!」」

艦長のナーシャ・カルチェンコが鼓舞するように言うや、ブリッジクルーが元気よく返す。

ナーシャもまたアクロバティックな操舵で鳴らしたのだが——。

「伊歩、張り切り過ぎないようにね」

「はい、艦長」

念を押されたのは正操舵士の月読 伊歩だ。

既に何度か述べたが、彼女もまた艦長に負けず劣らずのチキンレーサー。

普段の言動はおどおどしているのだが、一度操舵桿を握ると雰囲気が一変。曲芸とも言える操舵を披露する。

そして、彼女は正しく漲っていた。

放置すれば新人のコスモタイガーを追いかけ回しかねないため、ナ

ーシャは予め釘を刺しておいたのだが、当の伊歩は薄笑いすら浮かべ、グローブをはめ直す。

（やれやれ……）

隣の戦闘指揮席の篠田 巖はその様を見ながら軽く肩を竦めた。

――『伊吹』艦橋――

「新人隊、編隊を組み直しています」

「……鍛える余地が大分あるな」

観測士の報告に、艦長席の塩江龍一は一人ごちる。

些か時間がかかり過ぎだ。敵に奇襲されたら最初の一撃で3割はやられてしまう。

「副長、用意はいいか？」

「はい、いつでも」

操舵士席に陣取る副長兼任の綾歌麗奈が応える。

若手の操舵士としては、華麗な舵捌きの『ヤマト』の島 大介、ダイナミックな『相模』の大村耕作、アクロバティックな『鳥海』のフランベルク・白百合・アリアと『水無瀬』の月読伊歩の陰に隠れがちだが、無駄がなく流れるような操舵で、僚艦3隻に遅れをとつたことはない。

――『相模』艦橋――

「戦隊全艦、突撃隊形。対空戦闘用意！」

艦長席の冴子が指示を下す。

「新人隊、攻撃隊形に変わりました！」

「――全艦前進！」

『全機突撃！行くぞっ！！』

『相模』以下の13TFが加速しつつ前進を始め、それを目指して加藤四郎達新人が駆るコスモタイガーが突撃していった――。

――ミッドチルダ首都クラナガン郊外、首都第4飛行場、
訓練生食堂――

航空戦技教導官・高町なのは一尉は午前の教導を終え、教導生と昼食を共にしていた。

なのはが教導生から高い人気を博しているのが、こういう飾らない性格ゆえだ。

ともすれば高ランク魔導師は己を恃む傾向が過ぎ、他者を見下しがちなのだが、管理外世界の出身ゆえ、魔導師・非魔導師に関わらず同じように接するなのはは、威張らない高ランク魔導師として信望を得ているのだ。

「教導官、質問よろしいでしょうか？ 教導とは関係ないことなんですか……」

「――私に答えられることなら構わないよ。何かかな？」

斜向かいの教導生がなのはに質問してきた。

「最近、ディンギル帝国の話をとんと聞きません。教導官のところには情報は入っていませんか？」

“ルガールの虐殺”から数ヶ月が経過している。

“海”の一部が主張しているディンギル帝国への武力制裁は賛同者が集まらず、具体化する気配はない。

次元航行艦『ネストル』がディンギルの手に落ちた可能性が高く、管理局はディンギル方面に繋がる次元回廊を航行禁止とし、サーチャーを設置して警戒しているが、今のところ異常は見られない。

通常、航空武装隊に次元航行本部の情報が全て流れてくるわけではないが、ディンギル帝国関連の情報は重要であり、なのはにはクロノやフェイトといった“海”の士官の友人がおり、通常ルートより先に情報が入ることもあるのだ。

必ずしも教導生が知るべき情報ではないし、窘めるのは簡単だが――

「私も、ディンギル帝国関連の情報は聞いてないんだ。

何か変わった事があれば必ず発表が入るから、少なくとも今は、周囲が動揺しようと、それに流されずに私達のやるべき事をやるしかない。私はそう思うよ」

「はい……」

教導生達は頷いたが、不安の色は隠せないようだ。

無理もない、となのはは思う。

つい最近まで、時空管理局が次元世界の最高権威であり、なのはも、

目の前にいる教導生達も、その頃に入局した。

それが今では、ディンギル帝国に暗黒星団帝国（ガトランチスは首脳陣が全滅したため、脅威度は低下したと思われる）といった強力な軍事国家が管理局に牙を剥き、一方的にやられて数百名の局員が殉職してしまった。

これで管理局の権威は大きく揺らいでおり、もし一般市民が犠牲になれば局への信頼は失墜しかねないのだ。

なのは無論、教導生も士官であるから動揺を表に出さなくとも、不安が募るのは仕方ないところだ。

「――第197管理外世界との関係はどうなるんでしょう？」

別の教導生が聞いてきた。

「あの世界も私の故郷と同じく、軍隊は現地政府の一機関という存在だから、政府の命令なく勝手に判断したり行動する事はできないの。

今のところは対話する姿勢だから、悪い方に進む事はないと思うけどね」

「はい…。でも、向こうは管理局法を受け入れる事はないんでしょね…」

女性の教導生がぼつりと口にした。

「…魔法文化は存在しないし、宇宙戦艦みたいな兵器でないと自分達の世界を守れない以上、質量兵器を放棄する事はない。」

それに、地球連邦と地球防衛軍は、今の管理局と付き合いなくても殆ど困らないからね…」

正確には“今の体制の管理局”なのだが、
なのはそのままで言い切ることはできなかった――。

第189話『法の舟と戦神』 (前書き)

いよいよあの艦が登場です。

第189話『法の舟と戦神』

——天の川銀河・オリオン腕辺境、太陽系外縁部——

時空管理局所属の改L級次元航行艦『ラットバルド』は、本部からの指示により、第197管理外世界方面の哨戒任務に当たっていた。

「センサー、レーダーとも正常。次元断層反応なし。周辺空域に異常ありません」

「ん……」

過日、ある任務で第197管理外世界に赴いた経歴がある『ラットバルド』は、それ以後、しばしばこの方面の哨戒・監視任務についていた。

とはいえ、太陽系を囲む“エッジワース・カイパーベルト”から内側は地球防衛軍の衛星や哨戒艦艇による監視網が敷かれており、不用意に侵入すれば管理局の艦船では簡単に拿捕・撃沈の憂き目に遭うのが目に見えているため、カイパーベルトの外側に近寄るのが精一杯なのだ。

——小1時間程経過した頃か。

空域観測担当のオペレーターが緊張した声を上げた。

「前方左に空間歪曲反応を複数確認！」

「緊急空間転移スタンバイ！」

……それと、念のため、地球防衛軍との回線をいつでも開けるようにしておけ」

「……よろしいのですか？」

オペレーターが疑問の声を上げるが、それは仕方ないことだ。
管理局員は管理外世界の住民と接触することは規制されている。ましてや相手は軍なのだ。

但し、第197管理外世界こと地球連邦とは何度もコミュニケーションをとっており、知らない間柄でもない。

それに、管理局の艦船では『ラットバルド』と『クラウドイア』だけが地球防衛軍と直接通信できるコードを持っているのだ。

「出て来たのがガトランチスの残党や暗黒星団帝国の艦隊なら、知らせてやるくらいは良からう。
どのみち我々の戦力では手に負えないし、地球防衛軍には借りがあるのだからな」

「はあ……」

会話はそこで途切れた。

「転移してきたのは艦船5隻！

反応は地球防衛軍の艦船です……。『相模』級戦艦1、巡洋艦クラス3と……データベースにない艦船が1隻です！」

「新型戦艦：アリゾナ級か！？」

緊迫した観測オペレーターの声に、他のブリッジクルーも驚きの声を上げる。

「接近する。誰何されたら正直に答えればいい。
いきなり撃たれはせん！」

スールは即座に接近しての確認を決断した。

（『アリゾナ』級なのか、それとも……？）

帰還したフェイト達が齎した情報には、地球防衛軍の新型艦船のものもある。

その中で管理局が重視しているのは『アリゾナ』『モンタナ』等の大型戦艦と『海鳴』級試作大型巡洋艦だ。

『アリゾナ』と『モンタナ』は、かの『ヤマト』を上回る艦体規模を持ち、かつ1年間の無補給航海が可能という本格的な外・深宇宙戦艦で、既に『アリゾナ』は就役済と予想されている。

一方、『海鳴』級大型巡洋艦も現行の『相模』級戦艦に匹敵する規模で、やはり長期間無補給航海が可能という。こちらは既に2隻が就役している頃だ。

さらに、10万？を超える無人制御の超大型戦艦に、鹵獲したガトランチスの艦艇から状態のいいものを改装した編入艦艇も存在するという。

「周辺監視を嚴重にしろ。進路左50！全速前進！」

「はいっ！」

スールは地球艦がワープアウトした空間に『ラットバルド』を向かわせた。

「捕捉できるか？」

「今のスピードなら何とかありますが……何分にも巡航速度が違い過ぎます」

「わかった。とにかく接近しよう。速度そのまま！」

『ラットバルド』は最大戦速で地球艦に向かっていった。

——同宙域、『相模』艦橋——

「——接近する船は、時空管理局『ラットバルド』です!」

「:こちらで対処すると『マルス』に連絡。『鳥海』を差し向ける」

嶋津冴子は『マルス』への連絡を指示する

『ラットバルド』の接近は早々に地球側に捕捉され、警戒体制の全艦は一時緊張状態になったが、接近してくるのが一度接触したことがある時空管理局の改Ⅰ級艦『ラットバルド』らしいと知るや、冴子は同艦の進路を厄する形でコンタクトをとることにした。

今回の任務は就役したばかりの超アンドロメダ級戦艦『マルス』の試験航海の随伴と護衛。

時空管理局とは敵対関係ではないが、仮に友好国の船でも自軍の新鋭艦を長々と見せるわけにはいかない。

——超アンドロメダ級戦艦『マルス』は排水量16万?超、全長385?。波動砲3門、アンドロメダ級の主砲を改良した20インチ砲20門等、地球防衛軍艦としては破格大型戦艦であり、カタログデータ上の攻防力なら『ヤマト』をも軽く凌ぐが、将来のバージョンアップにも対応できる余地を持っている。

艦の省力化も一層進んでいるが、白色彗星戦役で『アンドロメダ』が呆気なく沈んだ教訓を取り入れ、素早くマニュアルオペレートに切り換えられるようにもなった。それだけのポテンシャルを発揮させるためには乗組員のスキルアップが欠かせないが、経験豊かな人材が少ない現状では訓練でレベルアップしていくしかない。

その点、艦長兼第7艦隊司令の山南は教官経験も豊富であり、うっ

てつけの人選だ。

既に『マルス』乗組員には厳しい訓練が課されているはずだ――。

――巡洋艦『鳥海』――

「接触まで50秒です！」

「念のため所属と船名を問い質して。回答しないようなら警告を」

観測士からの報告に、艦長のフランベルク・棗・シルヴィアは件の艦が『ラットバルド』か否かの確認を指示する。

ややあって――。

「返答が来ました。時空管理局所属『ラットバルド』です！」

――『ラットバルド』――

「接近して来る艦は地球防衛艦隊の巡洋艦『鳥海』と名乗っています」

「わかった。鳥海に『かの大型艦の名を知りたい』と打電してくれ」

どのみち、詳しい事を教えて貰えるわけがなからうが、艦名位は尋ねてもいいだろう。

ここに強硬派の局員が乗り合わせていなかった事は何よりの幸いだ。

それとは別に、空気が読めない者なら、臨検しろと言い出しかねないところだが、そんな事をしても無視されるか最悪撃破されてしまう。

しかし、スールも手ぶらで帰るつもりは全くなかった。

そして、少し置いて回答が来た。

「『鳥海』から回答。あの大型艦の名は『マルス』であるとの事です。」

「『マルス』か……。鮮明な映像データは取れるか？」

「はい、今とっています」

ここはいわば宇宙の公海。必要以上に挑発しなければ情報収集は認められている。

「モニターに出せるか？」

「はい、映像データ出します」

太陽からも遠く離れた太陽系外空間ゆえ、処理した映像だが、それでも『マルス』の艦影は比較的鮮明だった。

「推定ですが、全長は350ないし400？、質量は15万？以上。艦首波動砲3門、3連又は4連大型砲塔が5基。全体的な形状からみて、『アンドロメダ』級の拡大形と思われます」

「……何て艦だ。『ヤマト』や『相模』級ですら我々の理解を越える艦なのに……」

「これは、第197管理外世界からのメッセージなんだろうな。我々は独自の道を歩むという、な」

「……」

絶句しているブリッジクルーの中にあって、通信担当の女性オペレーターは黙々と己の職務を進めていた。

「地球艦隊、右に転針して離れていきます……。『鳥海』より入電、『貴艦の航海の無事を祈る』」

です！」

「追跡しますか？」

通信オペレーターの報告に、副長が引き続き追跡するかをスールに質すが、

「いや。やめよう。

どのみちこの艦では追いつけないし、先方の疑惑を買う可能性がある。

——『鳥海』に感謝の意思を伝えればいいだろう。本艦も次元空間に戻る！」

「わかりました」

これ以上留まれば地球防衛軍から警戒されかねない。収穫は十分あったのだ。

『ラットバルド』の姿がかき消すように消えた。

——時空管理局本局——

執務官室の一角、フェイト・T・ハラオウンのブースのアラームが鳴った。

「…！クロノ？」

フェイトは発信元が義兄のクロノだと気づくや、通話回線を開いた。傍らのシャリオ・フィニーノとティアナ・ランスターの表情にも緊張の色が走る。

「忙しいところ済まないが、皆至急僕のところに来てほしい。緊急

事態だ」

表情と声色からして、深刻な事態のようだ。

「わかった、すぐ行くね」

通話を切ったフェイトは2人の補佐官に向き直る。

「フェイトさん」

「クロノ提督の様子からみて、深刻な事態みたいです」

シャリオ、ティアナとも既にスタンバイできているようだ。

フェイトは内心で満足を覚えながらも、表情はそのままに告げる。

「外れてほしいと願っているけどね。まずは状況把握だね。2人とも行くよ！」

「ハイッ!!」 (×2)

「――皆、急に呼び出して済まない」

「ううん……。それで、何があったの？クロノ」

フェイト達が着席してから、クロノは改めて口を開く。

「……次元客船が遭難した」

「!!」

クロノの言葉に、フェイト達は耳を疑った。

「遭難って……まさか、『レム』や『レオニダス』のような事が再

発したんですか!？」

「……」

「そんな。どうしてそんな事が……」

身を乗り出して問い質すティアナに、クロノは無言で頷き、ティアナは力無く腰を下ろした。

「船はザンクト・ヒルデ魔法学院の高等部がチャーターし、第37自然環境保全世界に向かっていた。

乗っていたのは高等部1年生の生徒167名と職員10名、乗組員11名の188名。

次元回廊内で“黒いXV級に攻撃されている”との通信が最後に、こちらからの呼びかけに答えなくなった」

「黒いXV級……?」

一同の脳裏に浮かんだのは、デインギル帝国軍との戦闘で未帰還になった『ネストル』。

同艦のクルーが残虐極まる公開処刑に処せられた事が確認されている以上、『ネストル』の艦体もデインギル軍に鹵獲された可能性が指摘されていた。

デインギルはそれを改修して作戦に投入したというのか――?

そして、遭難したのはザンクト・ヒルデ魔法学院の生徒。ヴィヴィオの先輩に当たる者達だ。

そこでフェイトはハツとして顔を上げた。

「クロノ、私達が呼ばれたのは……」

「……そうだ。『クラウドディア』が初動搜索を命じられた。途中で『ラットバルド』も合流する。」

多忙なところ済まないが、君達にも参加してもらおう。出航は4時間後だ」

「わかりました！」（×3）

敬礼を交わした後、フェイト達は急ぎ足でクロノの執務室を後にした。

「……やはり、束の間の平穏でしかなかったか……」

クロノの沈んだ呟きは空調の風に流れて消えた――。

第190話 『次元世界波高し?』 (前書き)

今回はミッドチルダ市内のひとこまです。
そして短いです。

第190話『次元世界波高し?』

——新暦77年4月、ミッドチルダ首都クラナガン、ザンクト・ヒルデ魔法学院初等科——

その日、学院全てで午後の授業が自習になった。

午前中は通常どおりの授業だったが、昼休みも終わりに近づいた頃、突然全校放送で、全学年とも第5限を自習とする旨が知らされたのである。

「なにがあつたんだろうね?」

「……あんまりいいことじゃなさそうだね……」

2年2組に籍を置く金髪に紅翠のオッドアイの少女、高町ヴィヴィオは、すぐ前の席のクラスメイトであるコロナ・ティミルと会話を交わしていた。

ヴィヴィオが“いいことじゃない”と口にしたのには理由がある。

昼休み、件の放送がなされる少し前、学院理事長代理の職にある聖王教会騎士、カリム・グロシアが、秘書兼護衛のシャツハ・ヌエラを伴って現れた。

カリムが学院に顔を出すのは公式行事の時くらいで、何の行事もない日に現れただけでも珍しいのだが、心なしか2人の表情が強張って見えたのだ。

2人とも、子供達の挨拶に応えるためか、すぐ穏やかな表情になったのだが――。

——ヴィヴィオはかなり特殊な生まれ育ちであり、つい1年前は某事件のキーパーソンに祭り上げられていた経験上、他人の不安な表情には敏感なのだ。

（また、ああいうことがおきちゃうのかな……）

幸いにも今度は事件の当事者にはなっていないが、時空管理局の手に負えないらしい世界の存在は、ヴィヴィオも知るところになっている。

彼女自身、そうした世界の一つである第197管理外世界こと地球連邦の軍隊である地球防衛軍の士官とモニター越しに対面し、短時間だが会話したこともあるのだ。

（なのはママやフェイトママでもどうにもならないのかな……）

2人いるママが、“わるいことをする人”には負けない事を、ヴィヴィオは肌身に染みて知っているが、それは直接相手と戦ってこそだった。

管理局の艦船に乗っているところを、より強い艦船に襲われてしまえば、いかに強い魔導師でもどうにもならないことを半年あまり前に思い知らされたのだ。

そして、管理局とは全く違う世界の存在も。

その世界は、なのはママの故郷と同じ名前を持ちながら、とんでもなく強い艦船をたくさん持っており、その艦船を指揮している者達もまた、とても強い意思の持ち主であることを直感的に感じ取った。

その後、帰ってきたフェイトママからは、

「ミッドや、管理局では正しいとされていることでも、別の世界ではまちがっていることもあるんだよ。もちろん、その逆もね」

と聞かされた。

くわしくは、自分がもう少し大きくなったら少しずつ教えてくれるというのだが。

ヴィヴィオの思考はそこで中断した。
何故なら――。

「皆さん、突然ですが、今日はこれで下校となりました。
寄り道せず、真っ直ぐお家に帰って下さい」

戻ってきた担任が開口一番告げたからだ。
担任も緊張した表情をしている。

（やっぱり、何かあったんだ……）

子供達は一様に不安な表情になったのだが、詳しい事態を知ったのはその夜、管理局からの発表によってであった――。

――クラナガン中央港地区、港湾特別救助隊隊舎――

「――そんな――！」

緊急召集を受けたスバル・ナカジマ一等防災士は、上司たるヴォルツ・スターン防災司令から、事のあらましを聞かされ絶句した。

「第1次搜索隊を率いるクロノ・ハラオウン提督が、お前さんの派遣を打診してきたんだが……」

「行きます！行かせて下さい！」

上司に皆まで言わず、スバルは参加を申し出た。

——クラナガン港湾地区、海上特別教育施設——

『すまねえな。こんな時ばかり頼っちゃってよ』

画面の向こうで頭を下げる陸士108隊部隊長、ゲンヤ・ナカジマ三佐に、チンクとウエンディが返す。

「気にしないでくれ、父上。ああいう場所こそ私達の特性が活躍するんだからな」

「そうっスよ、パパリン。家族なんだから気遣い無用っス」

チンクとウエンディがゲンヤを父と呼んだのは、ひと月前、チンク・ディエチ・ノーヴェ・ウエンディの4人をゲンヤが養女にしたからである。

無論、ギンガとスバルも賛成した事で、一気に6人に増えた姉妹の順序は、ギンガ・チンク・ディエチ・スバル・ノーヴェ・ウエンディの順。

遺伝子学上、ギンガ・スバルの実妹と言っているノーヴェは

「ギンガはともかく、スバルにまで妹扱いされたかねえ！」

とごねたが、チンク・ディエチ・ウエンディに“説得”され、“不本意ながら”承諾したのだった。

「……でも、とんでもねえ事になっちゃったな」

荷物をまとめながらノーヴェがこちる。

「比べたくはねえけど、ドクターとあたしらがやらかしてた事がすげえつまらなく思えてきたぜ……」

去年、彼女達はある大事件に深く関与したが、彼女達やその生みの親は、無差別殺戮は考えていなかった。

しかし、今回、チャーター次元船を襲ったらしい連中は、民間船も関係なく攻撃したらしく、その前には管理局員を残虐極まるやり方で惨殺し、その映像を目にした彼女達も皆憤怒したが、同時に、管理世界の価値観が通じない世界が存在することも実感させられた。

（嵐みたいなこの世界で、あたしらがやれる事って何なんだろう？。……いや、自分で考えて見つけて、生涯それを貫き通すのが、あたしらに課された“償い”なんだろうな）

荷造りをしながら、ノーヴェは自分達に課された贖罪について思いを馳せていたが、

「……ノーヴェ、手が止まってるよ」

ディエチにツツコまれた――。

第191話『次元世界波高し?』（前書き）

冒頭に出る人物の名前は、ウィキペディアに準拠しています。

第191話『次元世界波高し?』

——ザンクト・ヒルデ魔法学院初等部の制服を着た少女はクラナガン市街を歩いていた。

碧銀の髪と、紫碧のオッドアイの彼女は、ふと、電器量販店の店頭に置かれている最新型テレビに目をやったが、次の瞬間、全身に悪寒が走る感覚に襲われて立ち竦んでしまったが、一斉下校になった理由も理解した。

（大変なことが起きてしまった……）

スポーツ中継を流していたテレビ画面の上にニュース速報のテロップが点滅した後に表示されたのは、『ザンクト・ヒルデ魔法学院高等部生徒が乗った次元客船が行方不明。正体不明の艦船から攻撃された可能性も』というものだった。

少女は地面に落とした鞆を手にとると、踵を返して足早にその場から立ち去る。

（……クラウドス、あなたやオリヴィエ殿下の時代のような、いや、もっと血生臭い時代が来てしまうんでしょうか——？）

少女——ハイディ・アインハルト・ストラトス・イングヴァルト（尤も、フルネームを名乗る事は殆どない）——の問いに答えられる者は誰もいなかった……。

——次元空間回廊——

搜索隊員と機材を載せ、僚艦3隻とともに本局を離れた『クラウドエイア』だが、件の船が緊急通信を発信した座標空間までは、最大巡航速度でも11時間を要し、それが皆の焦慮をかき立てる。

（あゝ、もおっ！遅い、遅過ぎるわっ！！）

焦りを隠せずにいたのはティアナ・ランスターだった。

XV級は在来のL級艦より大型重武装であるとともに、航行能力も上がっているのだが……。

（『ヤマト』や『相模』の船脚の速さと比べると、管理局の艦船は遊覧船程度ね。

武装も、アルカンシエル以外は豆鉄砲に紙みたいな攻防力しかない。こんなんじゃ、宇宙を席卷する星間国家の軍隊や軍事勢力に管理局は噛み殺され、世界はいいように食い荒らされてしまうわ……）

『ヤマト』を初めとする地球防衛軍艦船の性能を目の当たりにしてからは、管理局の艦船が、次元空間航行能力以外では数世代も遅れていることを実感せざるを得ない。

魔法科学も日々進歩している。

管理局関係では、AMF下でも使える新型デバイスの開発と試作も進んでいるが、実用試験が始まるのは早くて来年後半。

また、ジェイル・スカリエッティが開発・投入した無人兵器ガジェットドローンをベースにした空・陸戦用ガジェットもテストが始ま

ったが、量産と配備には今しばらくの時間を要している。
しかし、これまでの犯罪者やテロリスト相手はともかく、ガトラン
チスみたいな獰猛な軍事勢力相手には何とも心許ない。
格段に強力な艦船や機動兵器でなければ撃退できないのだ――。

（母さん……）

焦慮を隠せないティアナより少し離れた席のフェイトは、虚数空間
に消えていった母プレシア・テストロッサと、母が手掛けていたと
いう魔力炉“ヒュドラ”に思いを馳せた。

（あれが実用化されていたら、管理局の艦船はどのくらい強化され
ていたんだろう……）

今乗っているXV級は、計画段階では主動力に“ヒュドラ”を用い
るようになっていたというが――。

フェイトはかぶりを横に振る。

たとえば“ヒュドラ”が実用化されていても、出力では地球防衛軍の
波動機関には到底及ぶまい。それこそ、第97管理外世界のセスナ
機とF-35ライトニング？の差くらいに。

（……管理局の版図が拡大していけば、いつ強大な勢力と遭遇して
もおかしくなかった。

それを指摘する声は以前から上がっていたのに、管理局、特に海は
耳を貸さないまま突き進んだあげくがこの有様。

一歩間違えれば、地球防衛軍とも武力衝突していただろう。

それに、魔法以外の武装を質量兵器だと一様に決めつけ、ひどく嫌悪してきた現場の私達にも責任がある。

宇宙戦艦の乗組員は厳しい選抜と訓練をくり抜き抜けなければならず、質量兵器は誰にでも扱えるという管理局の認識は当たらない。

遅きに失するかも知れないけど、管理局規則を改めてでも、地球連邦から波動エンジンを含めた艦船建造技術を導入しないといけないんじゃないか……？)

『ヤマト』『相模』等の戦艦クラスや波動砲の技術供与は無理としても、巡洋艦クラス以下なら可能性はある。

地球防衛軍の艦船は見た目の大きさ以上に戦闘力が高いことは目の当たりに見て知っている。

さらに、武装はショック・カノンやパルスレーザー等のビーム兵器中心で、解釈さえ変えれば質量兵器には該当しない。

過日、管理局の質量兵器の解釈をフェイトから聞いた地球防衛軍の士官達は心底呆れた顔になっていた。

実弾兵器ならいざ知らず、魔法によらない兵器全てを質量兵器に指定しているのでは、魔法原理主義・高ランク魔導師優位主義と受け取られても仕方ない。管理局内でもそういう不満の声が上がっている。

管理局でも低ランク／非魔導師局員の方が多いのに、将官の大半は魔導師だ。

JS事件後の内部改革でいくらかは是正されているが、中途半端だという声が大きい。

魔法要らずで強大な軍事力を持つ国家と接触し、多くを敵にしてい

る現在、今までのような考えでは到底この“嵐”は乗り切れない、とフェイトやティアナは考えている。

クロノら幾人かの高官は賛同しているが、全体の意識改革は遅々と進まずにいた。

ネックは質量兵器。

拳銃はデバイス扱いで所持できるが、あくまで例外。主流を占める魔導師の間では魔法に拠らぬ武器に対する抵抗が強いのだ。

（黒船でパニックになった江戸幕府のように、外圧がないと変わらないのかな……）

フェイトの整った顔に、翳りがさした――。

――太陽系内、天王星軌道付近、戦艦『マルス』――

「第31駆逐隊、合流しました！」

「第18戦隊、合流完了！」

「自動艦統合指揮システム、異常ありません！」

それを確認した第7艦隊参謀長、ジェイムス・モーリーが艦長席を振り返り、報告する。

「司令、艦隊全艦集結しました」

艦長席に陣取る第7艦隊司令官兼任の艦長、山南は大きく頷くや、厳かに命じる

「――第7艦隊、発進する」

一際目立つ巨大戦艦『マルス』を中心に、大型戦艦『アリゾナ』以下40隻余りの艦艇は、演習地たる海王星空域に向けて発進していった。

第192話『事情と盆の空』（前書き）

デザリウム側には色々オリジナル（別称：単なる思いつき）要素があります。

第192話『事情と盆の空』

——我々地球人類が住まう太陽系から、実に約40万光年を隔てたところに位置する黒白こくびやくに重なる二重銀河。

その二重銀河をほぼ支配下におくのが暗黒星団帝国ことデザリウム帝国だ。

その首都星たるデザリウム星——。

この巨大銀河帝国とも言うべき星間帝国の頂点に立つ人物“聖總統”の住まいと執務所を兼ねる大宮殿の謁見室に、2人の男が黙然と座っていた。

前に座るのは帝国軍第4艦隊司令官のカザン中将。後ろに座るのは艦隊参謀長のスロハ少将。

更に司令官付の副官が別室に控えていた。

少し経った頃、謁見室に若い女性が入ってきた。

眉がないカザンら男性とは異なり、切れ長の眼の上には細いながらはつきりと眉がある。

その女性——サーダー——の姿を認めたカザンとスロハは起立し、目礼する。

「お忙しい中、お越しいただきましてありがとうございます。カザン閣下、スロハ閣下」

サーダは一旦言葉を止め、口調を改めた。

「畏くも、聖総統がお出ましになります」

居住まいを直した一同の前に、二重銀河の頂点に立つ男、聖総統スカルダートがゆっくりとした足どりで現れる。

臣下が直立不動で迎える中、玉座に座ったスカルダートは、カザンを手招いた。

「カザン、ここに呼ばれた理由は解っているね？」

「はっ」

臣下の回答に頷いたスカルダートは玉座から立ち上がると、改まった口調で告げる。

「カザン、君は帝国軍大将に昇進し、太陽系攻略軍司令官に就任してもらおう。

……君も知ってのとおり、この国に残された時は無限ではない。我が臣民の将来は、君の手腕にかかっているといってもいい。

この帝国のさらなる繁栄のために、力を尽くしてほしい。頼んだぞ」

元首の言葉に、カザンは頭を垂れて奉答する。

「我が身に余る光栄。

臣カザンは、この身に代えまして太陽系を制圧し、新たな帝都を建設してご覧に入れます」

カザンの奉答に満足したスカルダートは更に続けた。

「君の元には主力として第4艦隊に加え、第8・第9艦隊、並びに第2・第5機動兵団をつけるが、追加の人員や装備等、必要なものは私の名で参謀本部に要求して構わん。直ちに準備し、40回期（

デザリウム本星の平時自転周期。1回期Ⅱ地球の約27時間相当）
以内に出撃するのだ」

「はっ！！」

告げ終わるや、スカルダートは玉座につくことなく、カザン達の敬礼を受け、サーダを従えて謁見室から歩み去った。

「……早速出撃準備にかかる。

関係する司令官と参謀長を『ガリアデス』に召集するのだ」

謁見室を退出したカザンは、参謀長と副官に最初の命令を下した――。

――2202年8月、湘南市海鳴区、『翠屋』跡地――

照り付ける太陽の下、嶋津冴子と高町雪菜は“迎え盆”に合わせて、実家があった敷地の草むしりをしていた。

翠屋――高町家――跡地には向日葵が咲き誇り、斜向かいの嶋津家跡地には早咲きの秋桜が咲いている。

地面に置かれたラジオのアナログ中波放送からは、昨年、10年ぶりに再開された高校野球大会の実況中継が流れていた。

科学が進んだ23世紀にあって、中波／短波のアナログ放送が存続していたのは、ひとえにインフラが安価かつ強靱なこと。

何しろ、受信装置の構造が簡単な上に電源がなくても聴けるからで、ガミラス戦当時は長く短波のモールス信号で各国・地下都市間の通信を行ったほどである。

——一方、甲子園球場もまた一度は遊星爆弾で消滅したが、2201年、元の場所より少し内陸に、20世紀当時の姿に近づけて再建された。

しかし、日本国内だけでは出場校が足りず、台湾・韓国・中国・フィリピンにまで規模を広げ、東アジア高校野球大会として、2201年に始まっていた。

余談ではあるが、ガミラスとの戦争で地球のプロスポーツは格闘技等、一部のインドア競技を除いて壊滅的打撃を受けてしまい、再建はまず学生スポーツからということになっていた。

野球の場合、当初の計画では、各国持ち回りでの開催だったが、日本以外の各国では野球場の整備が進んでいなかったのと、甲子園球場Ⅱ高校野球の聖地というイメージが他国にも広がり、是非とも甲子園でプレイしたいとの声が強かったため、当面は甲子園球場での開催となったという。

因みに冴子は小・中学時代はバレーボールの選手で、中学では1年生にしてエースアタッカー。3年生では中学総体ベスト8まで勝ち進んだ経歴を持ち、宇宙戦士訓練学校でも女子バレー部のエースアタッカーだった。

それはよだんです
—— 閑話休題 ——

「ふう……」

真夏とはいえ、海岸沿いの建物が全くないため、海風がまともに通り、しんどい暑さではない。

尤も、冬は寒風が吹きすさぶのだが。

ガミラス戦後の地域再編で一帯は湘南市に統合されたが、市街地の再建は市役所がある旧鎌倉地区に留まっており、旧小田原市までの湘南地区は荒れ地からようやく草原に代わったばかりだ。

クレーター湾と一面の草原でしかない海鳴の地に、再び賑わいが戻るのはいつになるのか――。

「暗黒星団帝国は“来る”んでしょうか……？」

雪菜がぽつりと口にした。

ガミラス・白色彗星帝国との戦争は、雪菜から多くのものを理不尽に奪い去った。

自分以外の家族、親戚、友人等々……。

あんな思いはもうごめんというのは、雪菜に限らず、あの戦争を生き延びた人達全てに共通する思いだろう。

「私もあんな事は二度と御免被りたいけど、準備は悲観的に行うのが、軍というものだからな……」

答える冴子も声を落とす。一個人としての彼女もまた、ガミラスや白色彗星帝国との戦争で家族や友人、帰る場所を奪われた身だ。

だが彼女は軍人。失った者に嘆く事は許されない。

地球に仇なす者を討ち果たし、悲しみの拡大を防がなければならぬのだ。

尤も、それは敵兵を殺し、彼らにもいるかも知れない家族や恋人、友人達の悲しみを生産する事でもあるのだが。

「戦わないで済むなら、それが一番いいはずなんだが、あっちにとっては戦争こそが正義なのかも知れないしなあ……」

かの白色彗星帝国がそうだった。

かの帝国は征服（侵略）こそが正義であり、それをやめる時は滅亡の時だというのが国是だった。

立ち止まったら死んでしまうあたりはまさにマグロだ。

無論、地球連邦が掲げる正義とは到底相容れず、戦うしかなかった。残念ながら、勝者こそが正義という風潮はなかなか改まりそうになり――。

……白色彗星帝国との戦いから1年も経っていないが、地球防衛軍は躍起になって戦力の整備を行っており、その象徴といえるのが、先日就役が発表された超アンドロメダ級戦艦『マルス』と、旧白色彗星帝国軍からの改造編入艦だ。

『マルス』は素人目にもアンドロメダ級を大幅に拡大強化したものとわかったが、旧白色彗星帝国軍からの編入艦に対しては少なからぬ拒否反応があった。

これに対し、連邦議会で説明に立った藤堂司令長官は

「我が軍の艦船は白色彗星帝国軍のそれに全く劣るものではありませんが、かの国の艦船は長距離侵攻作戦に適したもので、居住設備等、部分的には我々が見習うべき部分も少なからず見受けられます。

無論、これらの点は今後の計画に活用することになりますが、我が軍は未だ再建半ばであり、使える艦船はたしかつての敵国のものであっても、どんどん活用しなければ戦力が足りないのです！」

なりふり構わぬ戦力の再建は、偏に新たな侵略に備えてのこと。ガミラスとは奇妙な休戦状態、白色彗星帝国の復讐も、先だつての

戦闘を最後に終息状態だ。

となれば、イस्कandalへの侵略を図った暗黒星団帝国が新たなる侵略者としてやってくる可能性が相対的に高くなる。と断言していた。

——転んでもただでは起きるなかれ。石に躓いたならばその石を持ち帰って詳しく調べろ——

地球防衛軍の技術部門は、イस्कandalはもとよりガミラス、白色彗星帝国軍、さらには時空管理局からも盗める技術はほとんど盗み取っているのだ。

とはいえ、際限なく戦力を揃えられるわけではない。

全てが再建途上の地球は人材も金も限られている。地球を取り巻く情勢は相変わらず不安定であるため、軍の予算は比較的多くまわされるが、それは他の分野にしわ寄せを強いる事であり、それを当然とすることは許されず、少しでも効率的に予算を使わなければならない。

尤も、勘違いする者は必ずいるもので、士官の中には思い上がった言動をとる者も出ており、市民から強いブーイングを買ったケースも複数報告されている。

「守ってやっている等と考えている者は我が軍には要らん。即刻退官願を書け！」

軍務局長のステファン・スミスは、朝礼で局員を厳しく戒めた。同様の檄を飛ばした指揮官は多数おり、冴子ら13TFの各艦長も乗組員を戒めていた。

軍の場合、人の腐敗が命取りになることは往々にしてある。
ましてや、今のような軍の存在感が相対的に増している時こそ注意
しなければならないのだ。

——雪菜が見上げる空は青く澄んでいる。

（青空はどこまでも、いつまでも澄んでいてほしいんだけど……）
《……そうだな、レディ》

少女の願い空しく、再び空が焦がされる時が静かに忍び寄っていた
——。

第192話『事情と盆の空』（後書き）

重核子爆弾発射までにはもう少しかかります。

第193話『次元世界波高し?』（前書き）

色んな意味でドツボにはまりつつある余寒…もとい、予感が。

第193話『次元世界波高し?』

——次元空間、『クラウドディア』——

—ブリッジ—

「あ、ああ……」

「そんな……」

「こんなの、ひど過ぎるわ……」

スクリーンに映し出された前方の光景に、ブリッジクルーは悲憤慷慨する。

声こそ上げないものの、艦長席のクロノ、執務官席のフェイト、ティアナ、シャリオも拳を握り締め、怒りを堪えていた。

映し出された次元航行客船『クリッパ108』は辛うじて船の形を留めているが、側面には大小の穴が穿たれ、多数の煙の尾を引いており、航行能力を失っていることは一目瞭然だった。

「『マリア・ジュナス』、目標に接近します」

『マリア・ジュナス』は、相次ぐ次元航行艦の遭難に衝撃を受けた管理局が建造した新型病院船で、その名は管理局黎明期に活躍し、生涯現役を貫いて8年前に天寿を全うした伝説の女性医療魔導師からいただいたものだ。

——余談だが、故レジアス・ゲイズや“三提督”ですら、マリアにかかればやんちゃ息子や弟妹同然だったという逸話があり、高町な

のはが9年前に瀕死の重傷を負い、再起不能の危機に陥った時には自ら治療とその後のアドバイスにあたり、その再起に貢献したのが伝説の医務官最後の仕事だった――。

「――ギンガ、そろそろ出られるか？」

クロノは艦載シャトルで待機する突入救助隊を呼び出す。

『はい、いつでも行けます。クロノ提督』

最初に突入するのはギンガ、スバルと旧ナンバーズ更生組の9名だ。

「強い放射能反応はないが、爆発が起きる可能性がある。無理だけはするなよ」

『わかりました！』

通信を終えたクロノ達は改めてスクリーンを見遣る。
あれだけ船腹に穴を穿たれたのでは、内部の酸素はすっかり吸い出されてしまっただろう。

「また、スバル達には辛い思いをさせてしまうな……」

「うん。でも、一体誰が何のために……」

「……やはり、ディンギル帝国なんだろうか……？」

皆、憤りとやり切れなさが入り混じった気持ちにさせられる。

「通信では黒いXV級とあったからな。」

ディンギルが捕獲した『ネストル』を改装してテロ活動に投入したという可能性が高いが……」

「もしその通りだとしたら、早急に『ネストル』を奪還するか撃破しないと、いずれ次元航行能力を持った宇宙戦艦が投入されますよ……」

『ネストル』は単なるテロ活動だけではなく、次元航行能力を持つ戦艦の建造を想定したデータ収集の役目を担っている可能性をティアナが指摘すると、ブリッジクルーは皆蒼白になった。

もし、下手人がディンギル帝国ならば、強力無比な宇宙戦艦が次元空間に大挙して入り込み、本局や各世界は重大な危機に陥るのだ。

「ティアナの言うとおりだ。その可能性は大いにある。

しかし、今の最優先事項は生存者の搜索だ。

単純に比較することはできないが、『レオニダス』はもっと手酷くやられていたからな。望みはある」

かつてガトランチスに襲われた『レオニダス』はもっと酷くやられていた。

率直に言えば、対艦戦闘を想定していなかった既存の次元航行艦の外板は材質も厚さも同程度の大きさの次元商船と大差ないのだ。

だとすれば、目の前の『クリッパー08』にはまだ生存者がいるかも知れない。

第一、あれほど手酷くやられた『レオニダス』でフェイト達3人は奇跡的にも生き延びたのだ。

『クリッパー08』で生存者がいる可能性は決して低くない。

既にスバル達が乗ったシャトルは『クリッパー08』に接近している。

専門の作業員が取り付き、外から乗船口のドアを開いた上でスバル達が突入するのだ。

「提督、『ラットバルド』のスール艦長から通信が入っています」
「繋いでくれ」

第197管理外世界（地球連邦と太陽系）方面に進出していた『ラットバルド』も急報でこちらに向かっていたのだ。

「ご苦労様です、スール艦長」

『いえ。こちらの方が大事です。経過はどうですか？』

「今しがた先行隊が突入したところです。」

『レオニダス』より損傷の程度は軽そうなので、望みはあると踏んでいます。が……。

そちらは何かありましたか？」

『……詳細は後ほど報告しますが、地球防衛軍はアンドロメダ級やXX級をも軽く凌ぐ大型戦艦を完成させました』

スールがもたらした情報に『クラウドディア』のブリッジクルーも息を飲む。

「『アリゾナ』か『モンタナ』ではないのですか？」

『幸い、随伴していたのは鳴津艦長の独立第13戦隊だったので、駄目元で照会したところ、艦名は『マルス』と回答してきた。』

フォルムは『アリゾナ』級ではなく、並列配置にもう1基追加した波動砲口等の艦首周りはアンドロメダ級に酷似していて、それよりも格段に大型だった。

君達を持ち帰った資料にあった詳細不明の実験艦というのが、この艦ではないだろうか……』

地球に滞在していた当時建造中だった『アリゾナ』『モンタナ』はアンドロメダ級ほどではないが、『ヤマト』を確実に上回る大型戦艦だが、『マルス』はそれすらも軽く凌ぐと言うのだ。

「……『マルス』には、地球の隣にある惑星の呼称と、古代神話に伝わる戦いの神の2つの意味があります。

その名を冠する以上、その艦はあちらの世界史上最強の戦艦ということになりますね」

フェイトの言葉の意味を悟ったのか、一瞬、ブリッジは静まり返ったが、クロノは気分を換えるよう促す。

「その『マルス』の事は戻ってからにしよう。今は『クリッパー08』救援が先決だ！」

その声にブリッジクルーも各自の作業に戻る。

ただ、フェイトとティアナは『マルス』の事も心に残っていた。

（海に加齢臭連中がいきり立つかも知れないわね……）

——ティアナ・ランスター執務官／元帥は、弱者、特に孤児に対する深い気遣いと裏腹に、上官等に対する遠慮ない物の言いっぷりと、凶悪犯罪者に対する峻烈かつ厳正な姿勢で畏怖されたが、前者、毒舌家の資質を開花させた“容疑者”は、彼女が17歳当時に初接触した異世界の女性軍人とその同僚の男性士官達、さらに当時その女性軍人に養育されていたという元戦争孤児の某女性実業家であるという説が有力である——。

第194話『次元世界波高し?』(前書き)

“ 珍しく ” 冴子が悩みます。

冴子「バカだから悩むに決まってるだろうが？」

第194話『次元世界波高し?』

『生存者発見』の一報が飛び込んできたのは、スバル達が突入してから50分経過した頃であった。

たちまち『クラウディア』のブリッジが色めき立つ。

「慌てるな。まずは『ジュナス』への収容が先だ。情報確認を急げ」

ひと通り指示を下したクロノはフェイト達に向き直った。

「『ジュナス』に行けるよう準備してくれ」

「…可能なら事情を聴くんだね?」

「そうだ」

少なくとも、事故の経過の一部はわかるだろう。

ともあれ、生存者の容態がよいことを祈るしかない。

——『クリッパ108』エントランス——

エントランスも瓦礫が散らばっていたが、爆発の危険はないため、『マリア・ジュナス』のクルーが死傷者の収容準備を始めている。

そこへ、

『生存者2名、お願いします!』

『わかった!』

スバルとノーヴェが女子生徒とアテンダントらしい女性を抱えて戻ってくる。

要救助者の容態等を『ジュナス』クルーに伝え、身柄を託すと、スバル達はボンベの再充填等の作業を受け、再び船内に突入していった。

「よし、急げ！」

生存者収容に、現場のムードは一時上がったが、更なる生存者発見の報はなかなか入って来ない。

スバル達に加え、次元航行部隊の救難隊員や聖王教会騎士団直属の救助隊員も人命検索に当たっているが、発見されるのはすでに事切れた者ばかりだ。

死者の多くは被弾によって生じた破口から空気が抜けた事による窒息死で、喉元をかきむしったり、白目を剥いたり失禁や脱糞、或いは舌を出した状態で息絶えていた。

「……見てられないっすよ、これは」

「む……」

ウェンディは思わず顔を背け、場数を踏んでいるチンクも顔をしかめずにはいられなかった。

「あの放射能ミサイルを撃ち込まれなかったのは不幸中の幸いだが……」

あのルガールのやり口にしては些かあっさりし過ぎてはいないか？

——『クラウドディア』ブリッジ——

『――クロノ提督、あなたはと思う？』

『クリッパ―08』に突入していたチンクからの通信に、クロノも思わず唸った。

「……確かに、あんな残虐行為をさせた人物にしてはあっさり過ぎるな」

『ブービートラップを仕掛けた可能性は否定できないと思うが……』
「完全破壊しなかったのはそのためなのか……？」

『直接兵士が乗り込んできた形跡はないが、不発弾があれば、それがブービートラップという可能性が高いと思う』

「わかった。それはこちらで調べる。君達は十分注意して搜索を続けてくれ」

『承知した』

通信を切ったクロノはサーチャーの発射を命じるとともに、僚艦にも『クリッパ―08』の船体表面の確認を指示した。

その間、船橋で搜索を行っていたギンガから通信が入る。

『残念ながら、船長ら乗組員はダメでしたが、幸い、航行データの記録媒体は回収できましたので、一旦離れます』

時間が経つにつれ、搜索範囲も広がっていったが、齎される報告は発見された遺体の数ばかりで、既に何体かはエントランスホールに搬送されている。

生存者は病院船『マリア・ジュナス』に収容されたが、死者を連れ帰るのは『クラウドディア』ら次元航行艦だ。

各艦では霊安室だけではスペースが足りず、倉庫の一部も遺体安置所に早変わりし、急拵えの祭壇と遺体収容袋が並べられており、更

に聖王教会から派遣された神父とシスターも待機していた。

『クラウドディア』のブリッジには『クリッパー08』の船内配置図が展開されているが、ほぼ全ての箇所に救助隊員が進入したことを示すように、図はほぼ黄色一色に変わっていた。

「……体制を切り換える。人命検索から遺体収容に変更」
「わかりました」

船内全域に搜索の手が及んだにも関わらず、生存者は2名だけで、生命反応はなし。

やり切れない面持ちで、クロノは遺体収容作業への切り換えを指示した。

心中には、襲撃者に対する激しい憤りと、『クリッパー08』の乗船者を救えなかった事への無力感がないまぜになっていた。

その時だった。スクリーンに映る『クリッパー08』の船体後部から閃光と火の手が上がったのは――。

――地球防衛軍・新横須賀基地、『相模』艦長執務室――

「……………」

「……………」

「……………」

テーブルを囲んで3人の男女が深刻な顔つきで押し黙っていた。

「：この事を他に知っているのは？」

「真田と（藤堂）司令長官だけだ」

敢えて感情を出さず問う冴子に、古代 守も感情を込めずに答える。

「万一、連中が侵攻してきたら、当然真っ先に拘束されるだろうか
らな。

その場合、周りの住民も巻き込んでしまうからな。それは俺達の本
意じゃない」

「：：わかった。引き受ける」

どのみち、こういう仕事ができるのは“万事屋”たる我々しかいな
いのだ。

「済まんな、こんな仕事を押し付けて」

「いいってこった。13TFは万事屋だからな」
ウチ

2人の傍らで、『相模』副長の太村耕作は同席したことを後悔して
いた。

『——平然と話してはいたが、嶋津艦長と古代参謀、特に古代参謀
の胸中は察するに余りあるものでした』

——太村は後日、軍務局の中島龍平ら数名にそう語っている。

古代を見送り、太村に二・三指示を出して下がらせた後、独り艦長
室に残った冴子は、唇を噛み沈んだ表情になった。

艦長たる者、乗組員の前で感情を露わにしてはならない。
一喜一憂しては乗組員を不安に陥らせる元になるのだ。

『喜怒哀楽は腹に込めろ』

『ひびき』艦長を拝命した時、沖田十三から言われた言葉だ。

冴子は幼少期から喜怒哀楽がはっきりしている性格だ。しかし、一艦を預かる者は、自分の感情をコントロールできなければ乗組員を萎縮させ、果ては艦と乗組員の命を失わせる事になるからだ。

「沖田さんや土方さんの域へは、道半ばにもなってないな……」

自嘲気味に呟く冴子だが、性別関係なしの厳格かつ苛酷な教導で、『鬼嶋津』（グーシーマンズ）の異名がつくほど訓練生から畏怖されるのは少し後のこと――。

第195話『薄命』 (前書き)

あの方の前途が明らかに・・・

第195話『薄命』

——『クラウドディア』食堂——

「……………」

スバル・ナカジマら特別救助隊員達は無言でいた。

『クリッパ108』で突然発生した爆発により遺体搬出活動は中止され、全員が退避した後、『クリッパ108』は全船炎と煙に包まれた。

結局、収容できたのは女子生徒と女性クルー1人ずつの生存者のみで、遺体や遺品は全く収容できなかったのだ。

「くっそおおっ!!」

隊員の1人であるノーヴェ・ナカジマが悔しさを爆発させ、壁に拳を叩きつける。

犠牲者の大半は10代半ばの少年少女。戦闘機人である自分達と単純に比較することはできないが、余り変わらない年頃に見える彼らの変わり果てた姿に、ノーヴェ達は一様に衝撃を受けていたのだ。

「どこの誰なんだよ! 非武装の民間船をなぶり殺しなんてよ!! あいつらに何の罪があるっていうんだよ!」

その叫ぶような問いに応えられる者はその場にいなかった——。

「また、助けてあげられなかった…」

肩と視線を落としたスバルも呟く。

要救助者をいるのに退却しなければならぬ。

救助隊員にとってはこれほど辛い悔しい事はない。

決して望んで得たわけではないが、普通の人より頑丈かつ強靱なこの身体。また、懂れていたあの人の教導の元で伸ばした力はこういう時にこそ役立つものではなかったか？

しかし、この現場で見たものは理不尽以外の何物でもなかった。

破壊を免れた後部ギャレー付近で自分と同年輩の女子生徒と乗組員を救出するのが精一杯だった。

救助隊員である以上、助けられなかった事もあるが、先日といい、今回といい、大半の要救助者を助けられなかった。

「……！」

込み上げてくる涙を必死に堪える。

泣く事は許されない。

かけがえのないものを失った犠牲者の家族の悲嘆の方が遥かに大きく重いのだから。

“ソードフィッシュ1”

——レスキュー隊員のエースオブエースであるこのコードネームの初代として名を馳せたスバル・ナカジマだが、この時はまだ己の無力感に悲憤する駆け出しの救助隊員でしかなかった。

「そう、わかったわ…」

息子からの報告に、総務統括官リンディ・ハラオウンも沈痛な表情になった。

『申し訳ありません。もっと早く到着していれば…』

「クロノのせいではないわ。命令受領から出発までは予想以上に早く進んだと皆驚いているのよ」

派遣命令を受けたクロノは、個人的なコネまで動員して人員と装備を、予想以上の短時間で揃えて出発していった。

客観的に見れば、僅か2名とはいえ生存者を収容できたのは上出来だろう。

無論、それを口に出せる状況ではないが。

「それで、救助したお2人の容態は？」

『シヤマルからの報告では、2人とも軽い一酸化炭素中毒で、後遺症の心配はないとの事ですが、問題は…』

「メンタルケア、ね…」

2人にとってはこれからが正念場だ。

仲間や同僚は皆死んでしまい、自分だけが生き延びたという事実は生涯消えない。

メンタルケアを入念に行わなければ、後日自ら命を絶つ事だってあり得る。

——ともかく、全てはクロノ達が帰還してからのこと。あとは自分の仕事だ。

「いずれにせよ、皆、帰ってきてから考えましょう。」

クロノも疲れているだろうけど、もう少し頑張ってちょうだいね」
『わかりました』

通信を終えたりンディは腕を組んで考え込む。

クロノには言っていないが、今回の襲撃犯がディンギル帝国であると明らかになれば、今度こそ武力制裁という事態が現実味を帯びてくる。

民間人を理不尽に殺されておいて泣き寝入りという事はあるからだ。

問題は、仮にそうなった場合、管理局の戦力は相手に通じるのか？

相手がディンギルだった場合、艦船同士の戦闘では、彼我の艦船の戦闘力に差があり過ぎて勝ち目はない。

ならば本星近くに艦隊を次元転移させ、首都をつくか？

アルカンシエルの威力を見せつけた上で交渉に持ち込むのがベターかも知れないが、向こうは『ネストル』に搭載されていたアルカンシエルも調べただろう。何らかの対策を考えていてもおかしくはない。

単なる反管理局武装組織ならば打つ手はいくらでもあるが、ディンギルやガトランチス、地球防衛軍みたいな勢力では返り討ちに遭うのが関の山だ。

地球防衛軍――？

ガトランチスをも退けた地球防衛軍ならばディンギルとも互角に戦えるだろうが、管理局内部では本局高官の過半数が地球防衛軍に対する拒否反応を未だ根強く持っている。

彼らの技術を全面的に導入すれば、確かに戦闘力は飛躍的に上がり、非／低ランク魔導師も戦力化できるが、非魔導武装Ⅱ質量兵器の導入は管理局の自己否定であり、また旧暦時代の混乱に逆戻りだというのだが――。

この見解にやや否定的な態度をとったのが、養女のフェイトとその補佐官のシャリオ・フィニーノとティアナ・ランスターだった。

『拳銃やライフル銃クラスは確かにそうだが、戦闘機や宇宙戦艦は厳しい選抜と訓練を経た者にしか扱えないし、一度その資格を得ても、常に研鑽していなければたちまちその資格を剥奪されてしまう。魔法文化がない世界からすれば、その気になればすぐ周囲を破壊できる自分達魔導師こそ、歩く火薬庫か戦術核みたいな存在だ』

『私達は管理局の基本理念に賛同したからここにいますが、管理局の戦力を大きく上回っている勢力が相次いで登場している今、理念に囚われ続ければ、管理局は崩壊しますし、管理局から地球連邦のような、政治と軍事のバランスがとれた国家と同盟する世界だって出てくるのではないでしょうか？』

フェイトの言い分は、視点を変えればそのとおりだし、ティアナの話もそうだ。

編入時の行き違いで管理局への反感が根強い世界にすれば、管理局より地球連邦と結んだ方がうまくいくと考えてもおかしくはないのだ。

そういった混乱を防ぐためにも、地球連邦との関係を進めたいのだが、管理局内部は二分されているし、地球連邦もまだ再建半ばで、自分達のことですら一杯らしい。

しかも、ガミラスとは休戦したもの、ガトランチスや暗黒星団帝国とは敵対関係にあるため、対応を誤れば管理局も巻き込まれる。

「日本の諺で、こういうのを“ナイユウガイカン”と言うんだったわね」

角砂糖×2とたっぷりの生クリームを入れた煎茶——通称リンディ茶。ゲンヤ・ナカジマ曰く“可哀相なお茶”——を口にしながらリンディは呟き、関係局との通話回線を開いた——。

——月軌道付近、戦艦『相模』——

「——調子はどうだい？」

嶋津冴子は急遽あつらえた特別病室にスターシャを見舞った。

「ありがとう。思ったよりいいわ」

「そうかい」

スターシャの答に冴子は表情を和らげる。

「それより、ごめんなさい。私のために多くの人達を振り回してしまつて……」

「それは言いつこなし。」

友達が困っているなら、手助けするのは当然のことさ」

表情を曇らせたスターシャを嗜める。

元々白磁のごとく色白のスターシャだが、病によるやつれと、あちこちにシミが出てしまっていた。

何より、艶やかだった金髪は光沢を失い、白髪すら混じっている。

軍務多忙なのと嚴重な面会制限のため、ふた月近く見舞えなかった
冴子は、先日、古代 守から写真を見せられて茫然自失してしまい、

「…………あと、どの位保つ？」

とだけ言うのが精一杯で、守は淡々と

「年は越せないだろうよ」

と答えた。

せめて最期の日々はサーシャと一緒に過ごさせてやりたいというのが
だが、運命と言うには余りに残酷な仕打ちではないのか……？

目の前に神とやらがいるのなら、サンドバッグ代わりに叩きのめし
てやりたいと真剣に考えてしまった――。

登場人物紹介（山南、カザン他）（前書き）

今回は新顔と“いつもの面子”です

オリジナル設定テンコ盛りです。

登場人物紹介（山南、カザン他）

——地球防衛軍第7艦隊——

？山南 良介

第7艦隊司令官兼戦艦『マルス』艦長

2149年生まれ 53歳。

先輩の土方同様に教育畑が長く、2200～2202年にかけては宇宙戦士訓練学校日本校の校長を務めた人物で、大村耕作や『ヤマト』『相模』のルーキー陣は彼の教え子にあたる。

現任教官時代は先輩の土方が『鬼の土方』『鬼竜』の異名で訓練生から畏怖されていたのに対し、『仏の山南』『仏山』の異名で畏敬されていた。

イメージCVは原作同様、小林 修氏

？ジェイムス・モーリー

第7艦隊参謀長。

2151年生まれのアメリカ籍黒人士官。

窮地にあっても沈着冷静なスタイルを崩さない。白色彗星戦役では戦死した司令官に代わって残存艦をまとめ、さらなる抵抗を図った。空前の超大型旗艦や自動戦闘艦運用など、新し物づくめの第7艦隊を率いる山南の補佐役として白羽の矢が立った。

イメージCVは江原正士氏

？古代サーシャ（諸般の事情により『真田藩』を名乗る）

外見上はティーンエイジャーだが、生後1年を過ぎたばかりである。

本名は『サーシャ・アム・ド・イスカンドル・古代』で、イスカンドル王国の正統にして唯一の王女なのだが、イスカンドル星消滅により、父・守の故郷である地球へ亡命した。

乳児〜少女期までの成長速度が地球人の10倍以上というイスカンドル人特有の体質を色濃く受け継いだため、一時地球に滞在した後、第2イカルス天文台を預かった父の親友、真田志郎の亡き姉の一人娘という肩書で真田らと共に第2イカルス天文台に赴いた。

真田藩としての年齢は17歳で、外見上も大差ないまでに成長した。

感受性が著しく発達する時期を地球で過ごしたが、その間、父の友人らの影響を受けてしまったらしく、チャキチャキな娘に育ったという。（真田志郎談）

イメージC V、原作どおり藩恵子氏にすべきか検討中……（汗）

——デザリアム（暗黒星団）帝国——

？スカルダート

デザリアム帝国の元首で、聖総統を名乗る。

デザリアム帝国が抱える致命的欠陥を解決すべく、地球侵略を計画したらしい。

イメージC Vは原作同様の大平 透氏

？カザン

デザリアム帝国軍大将、太陽系制圧軍司令長官

スカルダートの命により地球を探していたが、その地球と戦い敗れたガトランチス帝国軍艦を捕獲し、接收したデータから地球の位置等の詳細データを得る事に成功し、その功績によりスカルダートから太陽系制圧軍司令長官に任命された。

イメージC Vは原作同様の寺田 誠氏

？スロハ

デザリアム帝国軍太陽系制圧軍総参謀長

以前からカザンの片腕として力を発揮し、信任厚いNo. 2。
イメージC Vは大林隆介氏

いつもの面子。

？嶋津 冴子

地球防衛軍内惑星防衛艦隊所属、独立第13戦隊司令官代行兼戦艦『相模』艦長。

本作の主人公にして非ヒロイン。
桃の節句に“晴れて”30歳を迎えた。

軍服姿の時は凜として颯爽たるものだが、私生活ではマダオ。酒豪にして激辛食家。

見た目は、髪と瞳が黒い事以外は“20年後の高町ヴィヴィオ”。

イメージCVは戸田恵子氏

？真田 志郎

第2イカルス天文台所長の職にあるが、実態は『ヤマト』近代化改装工事の責任者。31歳。

『ヤマト』機関長の山崎とともに『ヤマト』の魔改造に精を出す一方、サーシャの後見人として養育にあたっている。

宇宙戦艦の設計から戦闘機の操縦に白兵戦、さらに宝石のデザインやウェディングドレスの縫製まで多彩な才能を発揮し、手腕の一端を目にした時空管理局の某執務官と補佐官をして『歩くロストロギア』と言わしめた。

CVは青野 武氏

？古代 守

地球防衛軍司令部付先任参謀。31歳。

余命短い妻スターシャを断腸の思いで娘と親友がいる第2イカルス天文台に送り出したが……。

CVは広川太一郎氏。

以上の3人は同期生。

訓練生時代は『3バカ・ラス』と言われた悪たれで、当時の主任教官兼寮監の土方 竜から最も多く雷と拳骨を食った。

？高町 雪菜

冴子の被保護者で14歳。

容姿は“髪と瞳が漆黒の15歳時の高町なのは”で、並行世界におけるもう一人の高町なのはの直系子孫。

家族は先祖代々、喫茶店『翠屋』を営んでいたが、ガミラスとの戦争で雪菜を残して全滅。長姉の幼なじみだった冴子に引き取られた。現在は勉学に励む一方、『翠屋』再興に向けて努力中。

亡母の桃香同様“魔法”を扱え、インテリジェントデバイス自律知能形媒体も持つが、地球は魔法文化がないため、身に危険が迫った時や治癒・ヒーリング以外は魔法を使わない。

イメージCVは南央美氏

？フェイト・テスタロッサ・ハラオウン

時空管理局次元航行本部所属の執務官（三等空佐待遇）20歳。

地球防衛軍の軍人らと関わり、もう一つの地球を直に見た事で、平和について改めて思うところがあり、魔法や質量兵器、管理局の在り方等については考え方が変わりつつある。

CVは水樹奈々氏

？ティアナ・ランスター

ハラOWN執務官付の執務官補。（陸曹待遇）17歳。

地球から帰還後は、フェイト共々本来の犯罪捜査より、相次ぐ艦船遭難事件の対処にあたることが多い。

自らの体験から、管理局の質量兵器に対する方針を批判的に見ており、管理局規則を改定してでも、地球防衛軍から技術を導入すべきであると主張。

CVは中原麻衣氏。

？クロノ・ハラOWN

管理局次元航行部隊所属の提督でXV級航行艦『クラウドディア』艦長。

25歳。

相次ぐ艦船の遭難という現実には、管理局の戦力不足を痛感しており、地球防衛軍・地球連邦とは協調すべきであると主張している。

本作においてはKYではなく常識的な苦勞人。

CVは杉田智和氏

？高町なのは

時空管理局で航空戦技教導官を務める一等空尉。

言わずと知れたエースオブエースだが、JS事件での後遺症が残るため、前線からは離れて後進の育成と育児に専念中。

地球防衛軍とは事を構えてはならないと考えているが、関わる事で管理局が変質したり、世界の守り手の地位を失うことへの戸惑いと

脅威を感じている。
CVは田村ゆかり氏

第196話『再会』（前書き）

母娘対面です。

地球・管理局とも、スピードの差こそあれ、事態が暗転していきます。

第196話『再会』

——第2イカルス天文台、特別病室前——

建造キャンセルになったアンドロメダ級戦艦の装甲板であつらえたスターシャ専用病室の前で、ここの責任者たる真田志郎と嶋津冴子は所在なげに佇んでいる。

軍制式のM222レーザーアンチマテリアルライフルやRPG-77ロケットランチャー程度ではびくともしない扉の向こうでは、約半年ぶりに母と娘が対面していた。

このエリアに立ち入れるのは、責任者たる真田とNo.2の山崎。それに当事者の真田 滯ことサーシャに、『相模』でスターシャとともに赴いてきた専属主治医と看護師ら医療スタッフ数名だけだ。

「……無力だな、俺達は」

「全くだ」

同期生2人は揃って天井を仰ぐ。

相手が宇宙艦隊ならば追い払うこともできようが、病魔、ことに友人の身を蝕む病には波動砲すら通じないのだ。

「……ヤツ（守）はこっちに来られないのか？」

あの男のことだ。私事より公務を最優先するに決まっている。自分から休みたいとは絶対に言うまい。
しかし……。

「雪が長官に直訴すると息巻いてた。

友好国の国王を見舞うのは重要な公務、いや、国務だろうってな」

「なるほど、確かにそうだな」

揃って苦笑を浮かべる。

秘書としてはおしとやかな印象が強い森 雪だが、いざとなればなまじな男以上に凄みがある宇宙戦士である事を、真田は何度も目に
して知っているのだ。

「ま、そっちは雪と長官に任せるとして、『ヤマト』はどうよ？」

「後は細かな調整だな。

本当はアイツらがすれば完璧なんだが、そうもいくまいよ」

そう言いつつ、真田は手にしていた端末を冴子に手渡す。

「……確かに、カタログデータじゃアンドロメダ級以上だな」

冴子が目になっているのも新『ヤマト』の全てのデータではないが、
単純な攻防力はアンドロメダ級をもいくらか上回っている。

「……艦船を動かすのはあくまでも人だ。

あの繰り返しは御免被りたいしな」

“あの繰り返し”は土方らを乗せたまま自爆した『アンドロメダ』
のことだ。

3ヶ月前に回収されたブラックボックスを解析したところ、『アン
ドロメダ』は都市帝国に体当たりする直前まで砲戦能力を維持し、
機関も完調だったことが明らかになった。

人手不足対策として自動化を進めたのはいいが、いざという時のリカバリー能力が、『ヤマト』はおろか、ドレッドノート級主力戦艦にも劣っていたことが『アンドロメダ』の命を縮めたのだ。

最前線で戦う主力戦艦以下の艦船もマイナーチェンジ毎に自動化・省力化が進んでいたが、それでもアンドロメダ級ほどではなかった。アンドロメダ級の中でも、ネームシップたる『アンドロメダ』は地球防衛軍宇宙艦隊の総旗艦、いわば戦略指揮戦艦として建造されたため、司令部機能が充実していた反面、ダメコン用のマンパワーが不足していたのだ。

就役前、真田はそれを指摘していたが、当時は1隻でも多く艦艇を揃えることが優先され、頻繁に最前線に出ることを想定していない『アンドロメダ』自体のダメコンマンパワーは先送りされた。

しかし、都市帝国という予想外の敵手の前に、『アンドロメダ』自身も直接戦わざるを得ず、大型ミサイルが艦橋部に命中爆発したことで、艦のコントロールを失ったことで呆気なく潰えてしまった――。

その後建造・改装された有人艦は、さらなる自動化を進める一方で迅速なマニュアルオペレーションへの転換も可能にした。

それは『ヤマト』も同様で、自動化そのものは『アンドロメダ』並になっていた。

無論、基本は従来並のマニュアルオペレートなのだが……。

「『ヤマト』は練習艦かね？」

「そういう見方もできるな。自分が受け持つ機器をちゃんと扱えんようじゃ、宇宙戦士の端くれにもならん。」

それに、『アリゾナ』もヤマトと同様のコンセプトで建造再開した

からな」

「なるほど」

旧式艦とされた『ヤマト』が生き延びた要因は元からの頑強さに加え、充実したマンパワーによるものだったことから、就役済みの『アリゾナ』『モンタナ』や、最近着工した『プリンス・オブ・ウェールズ』『ビスマルク』『ガガーリン』等、各州独自枠の大型戦艦は、程度の差こそあれ、『ヤマト』と同様にマニュアルオペレータを前提としていた。

「我々としては、マスプロ艦のアップデートも進めてほしいところだな。

暗黒星団帝国と戦うことになれば、今の16インチ砲じゃ正直しんどいしな」

暗黒星団帝国軍の、あの大型旗艦は『ヤマト』の主砲を受け付けず、波動砲でやっと片付けた。

ましてや機動要塞『ゴルバ』はデスラー砲を受け付けず、より大口径の『ヤマト』の波動砲でも装甲を貫通できる確信を持てなかった。

『ヤマト』『マルス』やこれから出てくる大型戦艦群はそのあたりの対策を打っているだろうが、打撃力の主力はあくまでドレッドノート級主力戦艦だ。

次世代艦が出揃うまでは手持ちの戦力でやりくりするしかなく、既存艦の能力向上は必要不可欠なのだ。

「――まだ泣きじゃくってるようだな」

「仕方ないさ。あの容態ではな」

戦艦の装甲板で造られたドアによって室内の音声が洩れ聞こえる心

配はない。

——ストレッチャーに載せられた母と再会したサーシャは、見る影もなく衰えたその姿に泣き叫び、送ってきた冴子と出迎えた真田・山崎は、拳を握り締めて腑甲斐ない己を罵るのが精一杯だった。尤も、当のスターシャは、

「ここは公の場です。軍に身を置く者ならば、公私の別を弁えなさい」

病み衰えた身とは思えぬ気魄で娘を窘めてみせた。

じゃあ行くわ、と冴子は席を立った。

「（スターシャに）会っていかなくていいのか？」

「——母娘の時間は有限だからな。後は頼むわ」そう言うや、冴子は手を振って病室を後にした。

——時空管理局本局——

「母さん、それ本当なの!？」

「……………」

胸倉を掴まんばかりに迫る娘に、リンディ・ハラオウンは苦渋に満ちた表情で応え、フェイト・シャリオ・ティアナは愕然たる思いで母／上官を見遣った。

「これ以上手をこまねいては、次元世界の安定に悪影響を及ぼ

し、反管理局武装勢力をも勢いづかせるからということよ」

「そんな。まだディンギルがやったと決まったわけじゃないんだよ！」

「わかっているわ。でも、ディンギルが犯人と断定されたら、ディンギルへの武力制裁、あわよくば管理世界への編入か殲滅をためらわないわ。海の上層部は。」

状況が状況だから、三提督方も今度ばかりは反対できないでしょうしね……」

——詰んだ——。

フェイトは事態が完全に泥沼に陥ったことを悟った。

手下人がディンギルでなく、暗黒星団帝国や新たな武装勢力なら、
またも敵が増えたことになるし、ディンギル——大神官大総統ルガール——の犯行ならば、何も手を打たなければ管理世界は管理局に強い不信を抱き、管理世界からの離反すら有り得る。

さらに、反管理局テロ組織をも勢いづかせてしまう。

しかし、管理局の戦力でディンギルを無力化できるのかと言えば、甚だ疑問だ。

普通に艦隊決戦を挑んだところで返り討ちにされるのが関の山。宇宙に散らばる屍を増やすことが目に見える。

今にすれば、最初にディンギルと接触した『アストラ』のやり方が悔やまれた。

もしもルガールの言う事が事実なら、『アストラ』の軽率さがとてもない毒蛇を呼び込んだとも言える。

仮に地球連邦の技術を全面的に導入できたとしても、今からでは到

底間に合わない。

（一体どうしたら……）

フェイトは胸中で苦悶し始めた。

そして、主の苦悩を感じ取った愛機は――。
バルディッシュ

（酒……、人肌に温めたお燗……）

第196話『再会』（後書き）

冴子

「ふっふっふ、遂に君達も20歳だな。おめでとう」

フェイト・なのは・はやて

「ありがとうございます」

フェイト

「……でも、その邪悪な笑顔は……？」

冴子

「よくぞ聞いてくれた。」

君達も晴れて酒を飲めるようになったわけだが、同時に『少女』ですらなくなったわけだ。後は坂道を転げ落ちるが如く……」

なのはは固まり、フェイトは“言うと思った”という表情になりかけたが、はやて共々、冴子の背後に立つ人物を見て顔面蒼白になった。

「冴子さん、少しお時間下さるかしら？」

「……はい……」

冴子はスターシャに連行されていった――。

はやて

「あ、あの人がイスカンダルの女王陛下なん？
メチャメチャ怖いやん！！」

なのは、震えながら

「私も同感……。あの人には勝てる気がしないよ（涙目）」

フェイト

「スターシャさん……。貴女も朱に交わってしまったんですね（泣）」

第197話『出兵?』(前書き)

寝冷えにご注意下さい……。

第197話『出兵?』

——ミッドチルダ首都クラナガン郊外、首都第4飛行場——

突然、午後の教導中止が発表され、教導官、教習生は全員が講堂に集められた。

その中に、高町なのもいた。

「……」

なののは顔色は冴えない。教導官の数名も厳しい表情だ。

というのも、彼女は同居しているフェイトから、本局のきな臭い動きを聞かされていたからだ。

——10日前の客船襲撃事件の実行犯がディンギル帝国軍と断定されたのは3日前。

そのニュースに管理世界は沸騰し、ディンギル帝国への対応を巡って激しい議論が湧き起こっていた。

それは管理局も例外ではなく、“海”の強硬派からディンギル帝国への武力制裁案が臨時理事会に提出され、今日の臨時理事会で採決される可能性が高いというのだ。

リンディやレティ、聖王教会のカリム・グラシア、ミッド防衛長官のアッテンボロー達は強く反対しているが、事が事だけに、今回はいわゆる中間派といわれる者達は賛成を迫られるだろうというのだ。

「でも、ディンギル軍はあの核ミサイルをはじめ、強力な艦隊や機動兵器があるんだよ。勝てる成算はできてるの!？」

当然なのは疑問をぶつけてみたが、フェイトは苦しげに

「……これまでは、こちらが小勢だったから負けていたけど、今度は300隻以上の大艦隊を動員して、さらに別動隊でディンギル本星をつき、交渉に持ち込む腹積もりみたいだ」

「本星をつくのはいいとしても、本当にアルカンシエルを撃ったら、ディンギル軍は前回以上に残虐なやり方で報復してくるよ。あの核ミサイルを管理世界に撃ち込むことだってためらわないかも知れない！」

ううん、ディンギルのルガルという人が国民の犠牲を何とも思わない人だったら、管理局に撃たせておいて、無差別報復に出てくるよ！」

捕虜を公開処刑するような人物なら、自国民に対してもいざとなれば冷酷非道な事もできるだろう。

第一、ディンギル軍とまともにぶつかって勝てる保証はどこにもない。

「……ディンギル帝国の版図は1つの恒星系だけみたいだから、国家規模は地球連邦より少し大きい位で、本星の位置は解っているから、直接本国近くに転移してアルカンシエルを向けて交渉を持ち掛けるつもりみたいなんだ……」

「フェイトちゃん、今の管理局にそんな事ができる力があると思う？」
「でも、ディンギル帝国が二段構えで防備を構えていたらどうなるの？」

あの放射能ミサイルは間違いなくあるだろうし、『ヤマト』みたいに地上から宇宙空間に向けて撃てる兵器があるかも知れないんだよ……」

「母さんやレティ提督はそれを指摘しているんだけど、それは敗北

思想に取り付かれた臆病者だと批難されるらしいんだ。

：：本局には魔法至上主義が蔓延っているけど、ディンギルや地球連邦みたいな魔法に頼らない軍事力を持つ世界は、いわば異教徒の世界にしか見ようとしらないんだ。

：：本音を言えば、魔法要らずで管理局を圧倒する力を持つ世界に対する恐怖心の裏返しから来る拒否反応だろうね」

「……………」

なのはは暗澹たる気分には陥っていた。

自分達が理解できないからと言って対話を拒んでいるのでは子供より始末が悪い。

ましてや、相手を十分知ろうとしないまま戦端を開く等は愚の骨頂ではないか――？

そのような事を思い返している内、本局から来た佐官が登壇した。

「本日は緊急かつ重要な報告がある」

苦虫を噛み潰したような表情のまま、件の佐官はひと呼吸置いて話し始める。

「――時空管理局は、先日の客船襲撃の実行犯たるディンギル帝国軍並びにディンギル帝国政府に対し、武力による制裁を加えることになった。

については、諸君達教導官と教導生にも担当部隊への転属命令が出る可能性がある。心しておくように」

ズン、と空気が重くなる。

航空戦技教導官・高町なのはにとっての地獄が始まろうとしていた

――。

――地球防衛軍・木星イオ基地――

嶋津冴子はモニター越しに内惑星防衛艦隊のタナリット司令官と相対していた。

『――君達はシリウス星系に赴いてほしい』

タナリットから命じられたのは、第7艦隊所属補助艦船をシリウス星系まで護衛することだった。

「――シリウス星系で演習を行うのですか？」

『そうだ。第7艦隊も全艦が出揃ったのでね。』

シリウス、プロキオン星系には白色彗星軍が遺棄した補給拠点が複数存在している。それを活用して自動艦の運用試験等がある程度の期間を要して行いたいのだ』

『マルス』や『アリゾナ』『モンタナ』は在来艦とは一線を画する強力な戦艦であり、『クレイモア』級自動戦艦も、うまく運用すれば頼もしい槍、あるいは盾になるが、まずは運用データを蓄積していかなければならず、広大な空域で性能いっぱい機の機動が不可欠だ。そのためのシリウス、プロキオン遠征演習だろうと冴子は予測した。

『――それともう一つ、内々の話がある』

「……とおっしゃいますと？」

タナリットは声のトーンを落とした。

『古代：兄の方だが、一時的に前線視察に出てもらうことになった』
「！……そうですか」

『ついでには、赴任先たる《マルス》に合流するまでは《相模》に添乗してもらうが、途中、主な基地にも立ち寄ってもらいたい』
「わかりました」

冴子は内心ホッとした。

スターシャと守の面会も現実のものになりそうだ。
あとは、少しでも夫婦・家族水入らずの時を長く確保してやることだろう。

スターシャは確実に衰弱していると真田から連絡があり、冴子や大山歳郎ら同期生達は焦りを隠せずにいただけに、これは僥倖だ。

「――出立はいつになりますか？」

『次の任務（船団護衛）終了後、整備・補給を受けて2週間後には出てもらいたい。第7艦隊の支援部隊とは冥王星基地での合流だ』
「わかりました」

敬礼を交わしてその場を辞す。

――その航海は、またも長く厳しい航海になることを、神ならぬ身ゆえ、誰も予想していなかった。

第198話『13TF発進』

「……だば、ぼちぼち行くわ」

「はい、行ってらっしゃい。艦長」

嶋津冴子と高町雪菜のこのやりとりも何十何回目、あるいは百回過ぎたか。

もとより私生活マダオの嶋津冴子がカウントしているわけがなく――

「何かあれば中島さんに相談しますから」

「ん。それと……」

雪菜の回答に頷きつつ、ふと頭の中に浮かんだことを口にする。

「……頭上の動向にも気を配れよ」

太陽系内に不審な宇宙船や不自然な動きをする小天体が入り込めば、即座に地球や各惑星の有人基地は即応体制に入る。

しかし、ワープで突然内惑星域（土星圏以内）に入り込んで来るケースもあるし、いきなり地球に降下／落下してくる可能性も否定できない。

暗黒星団帝国という、まだ全貌がわからない宇宙帝国主義国家がどんな形で地球に接触してくるか、全く予想がつかないのだ。

無論、いざとなれば避難勧告や避難指示、はては身柄の一時拘束も可能な避難命令も出るが、状況は常に変わるものだ。

軍や行政機関におんぶに抱っこではいけない。

冴子と言ったのは自分の目で見て判断することも必要というものだ。

『カピタン（艦長）、心配無用と断言はできぬが、そういう時は私も全力でレディを支援する』

雪菜の首から下がった青い石から洩い男性の声がする。

雪菜が亡き母から継承した全自律魔法支援媒体——時空管理局式呼称ならインテリジェント・デバイス——の『ピュア・ハート』だ。

——高町家は20世紀終わりに喫茶『翠屋』を開業したが、2代目のオーナーパティシエールを皮切りに、何人か魔法を使える者が存在し、7代目の桃香とその末娘である雪菜も例外ではなかった。

とは言え、地球における魔法や魔術の類は公認されていないため、おおっぴらに魔法を使うことはできない。雪菜とピュア・ハートが組んでから全力全開で魔法を使ったのは、あのズオーダー大帝の要塞戦艦の砲撃から自身と周囲の人間を守る為にやむなく発動させた時くらいで、雪菜は今後も積極的に魔法を使う気はないのだが——。

冴子を見送った雪菜は蒼天を仰ぐ。

抜ける様な青空は、ガミラスとの戦争の後に戻ってきた。

皮肉にも総人口の激減と宇宙空間における高効率太陽光発電の安定化が21世紀以降減少を続けていたCO₂やNO_xを更に激減させて、都市部でも抜けるような青空や天の川を見られるようになり、ヒマラヤやアンデス、ヨーロッパアルプス等の高山では白昼でも星を見られるのだ。

「暗黒星団帝国、か——」

仮に攻めてくるにしても、この地球を支配するメリットがあるのかな……？」

かの国は星間戦争に必要な不可欠なエネルギー確保のためにガミラス星やイスカンダル星のマグマを採掘しようとしたが、スターシャから提供された資料を元に地球の内部構造を再調査したが、マントル（内核にはガミラシウムやイスカンダリウムに相当する放射性物質は存在と発表されており、火星についても同様の発表がなされた。水星と金星はこれから調査する予定だが、同じ結果が出るだろうと言われている。

もつとも、公式発表自体が虚偽という可能性も否定しきれないのだが。

『何とも言えんな。』

単にムカついたからぶちのめす、という理屈もあるかも知れん。行動原理が地球人とは根本から違うだろうからな』

少女の守り石は淡々と告げた。

（……そんなにメンタリティがかけ離れてるのかな？

あの白色彗星帝国の人だって、メンタリティは地球人と大差なかったのに……）

雪菜が思い至るのは、過日、冴子と激論を演じたあげく、座乗艦ごと屠られたかの国の総参謀長のことだ。

どんな内容だったかは“軍機”のため、公表されるのは数十年後になるが、真田志郎が

「貰い手がない女同士の子供じみた口喧嘩に過ぎんよ。恥ずかしくてとても公表できんさ」

とバツサリ斬り捨てたことを雪菜は聞いていた。

（真田さんの言うとおりなら、白色彗星帝国人のメンタリティは地球人とさして変わらないんだよね。容姿だって、肌の色と眉毛以外は地球人と変わらないし。

暗黒星団帝国人も、映像や艦長の話の限りじゃ、地球人と大差ないし）

冴子は暗黒星団帝国軍のメルダースという司令官と直に会話している。

詳しい内容は当然聞けなかったが、会話は一応成立したとだけ聞かされていた。

ならば、話し合いで問題を解決することだって可能だろう。

「何で、この世界のリーダーは戦争バカばかりなんだろうね……？」

『案外、弱虫なだけなのかも知れんな』

雪菜の根源的な疑問に対し、守り石は即座に切り返した。

「……そうだね。皆いい大人なのに、意気地無し揃いだよね」

雪菜は苦笑したが、数年後、地球Ⅱタマゴタケモドキ説を口にして冴子達を閉口させるのだった。

――半日後。

「波動エンジン、エネルギー120%！」

「戦隊全艦、発進に支障ありません！」

「波動エンジン、起動！」

「『相模』発進！」

大村の号令とともに『相模』は前進。『水無瀬』『烏海』『伊吹』も主機関に火が入った。

「第13戦隊、発進する！」

冴子のアルトが艦橋に響き渡るとともに、13TFの4隻は増速して一路アステロイドベルトに向かう。

最初の目的地は第2イカルス天文台だ――。冴子のアルトが艦橋に響き渡るとともに、13TFの4隻は増速して一路アステロイドベルトに向かう。

最初の目的地は第2イカルス天文台だ。

「本当なの！？フェイトちゃん！」

ヴィヴィオが眠りに就いたのを確認してから、フェイト・T・ハラオウンはディンギルへの制裁作戦に『クラウディア』と『ラットバルド』が組み入れられたのを親友の高町なのはに打ち明けた。

「じゃ、フェイトちゃん達も行くの？」

「ううん。私達は乗り組みから外れた。
宇宙空間じゃ魔導師は役立たずだからね。
ただ、気になる事があるんだ」

「気になる事？」

フェイトが少し声のトーンを落とした。

「……今回の任務、穏健派の艦長の大半が動員されてるんだよね」
クロノやスールは言わずもがなの穏健派であり、今回の武力制裁に
も反対の立場だ。

「……懲罰人事じゃないよね？」

なのはの表情が曇る。

「そんな事はないと思いたいけど……」

言葉とは裏腹に、フェイトの表情は冴えない。
まさか、そんな事ありえないと思いたいが、疑念を払拭すること
はできなかった――。

第198話『13TF発進』（後書き）

冴子

「：：確かに、白色彗星やらディンギルやらにすれば、地球は一見美味しそうな標的に見えただろうな」

雪菜

「でも、皆酷い目に遭いました。

ガミラスは本星をメチャクチャにされたし、白色彗星は首脳陣が壊滅。

デザリアムやディンギルは文字通りの国家消滅。ボラー連邦の首相は、出しゃばったばかりに命を縮めたようなものでしたし。

どう考えても、地球はある考えの人間には美味しそうに見えても、その実、凶悪な毒キノコとしか思えなくなりました」

冴子

「タマゴタケのつもりで食ったら猛毒の“モドキ”だった、か。

：：確かに、地球にちよっかい出した連中はロクな末路を辿ってないなあ

「

（：：それにしても、雪菜のヤツもとんでもない事をさらりと言ったな。誰に似たんだろうな：：？）

※“タマゴタケ”は一見毒キノコっぽいですが、実はとても美味しいキノコです。

“タマゴタケモドキ”はその名のとおり、タマゴタケに似た、とても凶悪なキノコです――。

第199話『夫婦?』 (前書き)

短いです…

第199話『夫婦?』

アステロイドベルト外周空域で、いくつかの光点が乱舞している。

『航跡が棒切れになってるぞ、気を抜くなっ!!』

『は、はいっ!』

『相模』戦闘機隊の各機が加藤四郎ら『ヤマト』の新人パイロットが駆るコスモタイガーを追い回し、彼らの教官である坂本が若鳥達に檄を飛ばしていた。

「……………」

「……………」

「……………」

少し離れたところから、その様子を窺うように1機のコスモタイガーが滞空していた。

機首に燕のマーキングを施した三座タイプである。

操縦桿を握るのは『相模』戦闘機隊長の山本明。

ナビゲーター席には真田志郎が座り、最後部の銃手席には『相模』艦長の嶋津冴子が仏頂面で座っていた。

機首の燕マークが示すように、この機体は冴子が『長門』戦闘班長に就任した時に受領し、『相模』にもそのまま持ち込んだのだが、当然ながら冴子自らが操縦して出撃する機会等なく今日に至っている。

で、“ヒヨッコ共の成長確認”と称して冴子が自ら飛ぶと言い出したところ、副長の大村とチーフパイロットの山本からは渋面を向け

られ、真田からはにべもなく却下された挙げ句、銃手席に乘せられるはめになった。

「何で私がここなんだ…」

ふて腐れた冴子は旋回パルスレーザー機銃をくるくる回したり、盛んに銃の仰角を変えたりしている。

「敵襲に対応するには、これがベストの配置だからに決まってるだろうが」

「機長が銃手なんてあり得んだろうが…」

「だから前例を作ってやったのさ。てか、クルクル回るの止めろ」

「んな前例要るか！」

第一、お前の口から前例つつー単語が出る事自体あり得んわ！」

銃座ごとクルクル回り続ける冴子に、凡そ前例とは無縁であるこの男は、しれっとした表情で追い撃ちをかけ、冴子は自棄気味に返した。

「ははは…」

後席の先輩2人の丁々発止に、操縦席のエース（山本）は、乾いた笑い声をあげるだけだった――。

見る影もなく痩せ細った妻の手を、守はそっと握る。

「ごめんなさい。地球にとって大事な時なのに、あなたや冴子さん達に寄り道させてしまって…」

「…何も言わなくていい。」

素通りすれば皆が後悔するからな」

スターシャが病に臥せていることは公式発表されており、各州から見舞いのメッセージが届けられている。

ただ、余命が限られているほど悪い事はまだ公式発表されておらず、連邦政府では大統領等限られた者にしか正確な病状は報告されていない。

故に、正確な病状を知る親しい者からすれば、知っていて素通りすることは到底できないし、軍首脳部もまた、妹を失ってまで波動エネルギー技術等の超ハイテクを賣してくれたスターシャに足向けて寝られず、古代 守が彼女を見舞うのは当然という認識であり、藤堂以下の幹部連も巻き込んで融通を効かせたという次第だ。

そうでもしないと、公私に厳格な守は、自分からは妻の見舞いに行こうとしないからだ。

「……まあ、お節介焼きが沢山いるからね。俺の周りには」

全く、上官といい、先輩といい、後輩といい、同期生あいつらといい…。

「いいじゃない。私にはサーシャ（妹）しかいなかったもの。世話好きのお友達が沢山いて、羨ましいわ」

「……あの子（娘）の周りには小うるさいおじさんおばさんばかりになりそうだがね」

小うるさくておっかない？連中だから、嫁の貰い手が現れるかどうか、極めて不安である。

というか、“虫”の心配がない代わりに、あの連中の毒に染まる心配があるのだが――。

「多少の毒は免疫にしよう位でないと、この厳しい時代では生き延びられないでしょう？」

「…私はダメみたいだけど、サーシャはタフに生き抜いてほしいわ」

「…君だって、まだダメと決まったわけじゃないだろう？」

「サーシャが私の分まで力強くはばたいてくれればそれで十分よ。宿命に縛られないあの子なら、私なんかより明るく力強く生きていくわ…」

「…：スターシャ…：」

聡明過ぎる程の妻にごまかしが効かないことは十分わかっていたため、守は慰めの言葉をかけることができずにいた――。

第200話『夫婦?』（前書き）

冴子

「塵も積もれば何とかやらで、遂に200話か」

雪菜

「作者は少話多連投しかできませんから、別に大した事じゃありません。」

大体、完結の目処すら立っていないんですから」

ティアナ

「雪菜、すごいきついわ……」

サーシャ

「だって、雪菜ちゃんの言った事は全て事実ですから。作者の頭は中二病以前だし」

フェイト

「サーシャ、見た目はお母さんを彷彿とさせるのに……」

ティアナ

「染まりましたね……」

古代 進・高町なのは

「あの……、僕／私達の出番は……?」

冴子

「進はもう少し待て」

ヴィヴィオ

「なのはママは……当分モブキャラ扱いだって。
作者のオヂサンが、ママの立ち位置に悩んでるみたい」

なのは

「作者さん、隠れないで出て来て下さいっ!!」

フェイト・ティアナ・ヴィヴィオ

「なのは（さん／ママ）落ち着いて！ レイジングハートも何とか言
って！」

雪菜

「向こうのご先祖様は血の気が多いんですね……」

第200話『夫婦?』

『何で、何でクロノが行かなきゃならないのっ!?』

エイミイの第一声はそれだった。

『そんなに管理世界を拡大たいんなら、拡大がってる連中だけで行けばいいんだよっ!』

「エイミイっ!」

忿懣をぶちまける妻に、それ以上言うなとばかりに声が大きくなってしまう。

エイミイの言う事はわかるが――。

「今回の任務の第一はディンギルに対する武力制裁だ。これ以上あの国を放置すれば、今後もいいように管理世界に対するテロが行われる。

もうそんな事をさせないために、ディンギルにある程度の損害を与えて、二度とする気にさせないための任務なんだ」

そう言いながら、クロノの心中には無力感が募る。

武力制裁といえは聞こえはいいが、内実はアルカンシエル先制攻撃により、ディンギル本土を半ば焦土に変える、れっきとした戦争だ。

ルガルラディンギルの指導者層は許すことができないが、だからといって普通に暮らしているであろうディンギル国民まで犠牲にするやり方には納得できない。

いくら敵対しているとはいえ、魔法文化がない世界を格下に見る姿勢は相も変わらないのか――？

クロノは、武力制裁の裏に隠された任務にも思いを馳せる。

もう一つの任務。ディンギル帝国軍の技術を没収して、管理局の戦力とすること。

ミサイルのような実弾兵器はダメにしても、エネルギー兵器は、極端な事を言えばどうにでもごまかせる。

あれだけの戦闘力を持つ艦艇を管理局のものにすれば、次元航行能力さえ付加できれば、反管理局テロ組織の殲滅も容易になるし、今後の管理世界拡大も楽になるだろう。

獲得できれば、だ。

失敗した時のリスクは余りに大き過ぎて口にするだに恐ろしい。

それに、成功したらしたで、管理局はガトランチスみたいな侵略的組織と堕してしまいかねない。

もしそうなれば、真っ先に地球連邦・地球防衛軍と戦闘になる可能性が高い。

フェイト達の一件で交流を持ったとはいえ、正式に友誼を結んだわけではない。いざ戦闘となれば容赦なくこちらを壊し、殺すために手ぐすね引いて待ち構えているだろう。

次元航行能力を持たせた『ヤマト』や『相模』、あるいは超大型戦艦『マルス』あたりが本局に波動砲を撃ち込みに来るかも知れない。彼らは“侵略者”に強い敵愾心を持ち、その企みを止めるためには敵国の中枢を攻撃するのともためらわないのだ。

殺し殺される覚悟が皆無か希薄な管理局に、そういった修羅場をくぐり抜けられるだけの気魄があるのか、クロノは自分自身も含めて首を横に振ることしかできずにいた。

説得が奏功したか、エイミィは渋々だが矛を収めてくれた。

『——でも、これだけは約束して。』

：：どんなに無様でもいいから、『クラウドディア』のクルーと一緒に生きて還ってきて。

魔導師や局員の代わりはいくらでもいるけど、家族の代わりはいないんだからね。いい？』

眼を真っ赤にして早口で言うと、さっさと通信を切ってしまった。

「：：：まったく」

あの辺は昔から変わらない。思わず苦笑が洩れてしまったが、すぐ表情を引き締めた。

「——当たり前だろう？」

こんな任務で父クライドの元に逝くのは真っ平ごめんだ。母もそんな事は許しはしない。

無論、『クラウドディア』の乗組員も1人として死なせるつもりはない。

「：：：死んで花実が咲くものか、だ」

第97管理外世界には、実に含蓄のある言い伝えが数多く存在する。

こういう諺はミッドチルダにはなく、ゲンヤ・ナカジマの祖父やギル・グレアムといった、かの世界の出身者によって持ち込まれたも

のだが、近年、高町なのはと八神はやてが実績と知名度を上げていくに伴い、第97管理外世界の民俗文化に対する関心が高まったことにもよるだろう。

——いずれにせよ、自分は部下の命に対する責任を果たすまでだ。地べたを這いずり回ってでも生きて帰る。こんな馬鹿な作戦を立てた連中の思惑どおりにはさせない——。

「サーシャとは話せたか？」

「……ああ」

『相模』艦内食堂《早雲峽》で、差し向かいで野菜天そばを啜りながら尋ねてきた悪友に守は応えた。

返事までの一瞬の間。父娘の会話がどんなものだったか、大体想像がつく。

こればかりは流石の真田でもどうにもならなかったらしい。相変わらず嘘が下手クソな奴だと、冴子は内心で長嘆息した。

（私が宇宙戦士訓練学校に入る頃の嶋津の養父も、こんな思いだったのだろうな……）

何しろ養父は最後まで冴子が宇宙戦士訓練学校入りすることに反対し、最後は

『勝手にしろ！大馬鹿娘……！』

『ああ、勝手にするとも……！』

売り言葉に買い言葉。喧嘩別れ同然に海鳴の実家を飛び出した冴子は、その後遂に養父と正式に和解することなく、間に立ってくれた養母共々死別してしまった。

——自分の選んだ道は正しかったと確信しているが、養父の理解を得る努力が足りなかったと、冴子は今もって悔いている。

古代とサーシャには自分達と同じ過ちはしてほしくないが、どうにもタイミングが悪過ぎる。

スターシャの意識がある間にサーシャの気持ち解れてくれればいいのだが、これは一家3人の問題で、自分も真田も如何ともし難い。

何とか父娘の時間を作ってやりたい——。

「……なあ、古代よ」

「何だ？」

「——いっそ、沖田さんの後継いじまえば？」

さらりと冴子は口にした——。

第200話『夫婦?』(後書き)

ぼつぼつ重核子爆弾発射しますか……。。

第201話『シリウスへ』（前書き）

些かガス欠気味……。
短いです……。

第201話『シリウスへ』

土星圏タイタン。

地球連邦は、土星圏を内惑星圏と外惑星圏の境界と定め、タイタンを始めとする主要衛星には地球防衛軍や宇宙開発庁等が

有人・無人の基地を設置しているが、タイタンの防衛軍港はそれでも最大のもので、外惑星に向かう艦船は原則としてここに寄港するのだ。

——正反対の土星軌道上にもこれに準じた施設の建設が取り沙汰されており、かの白色彗星帝国が遺棄した都市帝国の下半分をここに移動して大改装する話も出ているが、今しばらく時間がかかりそうだ——。

そのタイタン空域に様々な艦船が遊弋している。

地球防衛軍の制式軍艦もあれば、民間の貨物船の形をしたもの、はては旧ガミラスや白色彗星帝国軍の艦船らしきシルエットの船も見受けられる。

これらは太陽系内や周辺宙域で放棄されていたものを地球防衛軍が接收し、艤装を地球式に改めたものだ。

「艦長、補給艦集結完了しました」

「ん…」

副長・大村耕作の報告に、艦長席の嶋津冴子が頷く。

13TFは、シリウス星系で演習中の第7艦隊にこれらの補給艦船群を合流させるべく随伴するのが任務なのだが——。

「艦長、『デ・ロイテル』のオラニエ艦長から通信です」

「繋いでくれ」

補給部隊に随伴するのは13TFだけではない。巡洋艦『デ・ロイテル』他、ヨーロッパと南北アフリカ州の巡洋艦、パトロール艦各1、駆逐艦6の護衛艦隊が本来の護衛戦力だが、藤堂長官の指示により、急遽13TFも随伴することになったわけだ。

今回の場合は最先任である『デ・ロイテル』のオラニエ艦長が全体指揮をとることになっている。

メインスクリーンにオラニエ艦長の姿が映し出された。

オラニエは齡61。一般隊員から現場一筋で叩き上げて今の地位に到達しただけあって、老練な指揮には定評がある。

敬礼を交わして名乗り合う。

「『相模』艦長の嶋津です。13TFの指揮を代行しています」

『：《デ・ロイテル》艦長のオラニエだ。貴隊の活躍ぶりは聞いている。シリウスまでの短い間だが、よろしく頼む』

「はっ！」

冴子は若くして戦艦を預り、さらに代将旗をも掲げる立場にもなったため、ともすれば年長の艦長連からは白い眼を向けられがちだが、オラニエは人物が練れているのか、そういう言動は窺えなかった。

他人のやつかみなど知ったことではないが、意思の疎通がスムーズであることに越したことはない――。

『デ・ロイテル』からの指示が飛び、各艦は所定の位置につく。
13TFは艦隊の後衛を固める位置につき、『水無瀬』がしんがりだ。

やがて、『デ・ロイテル』から発光信号が撃ち上げられた。

「発光信号撃て！戦隊全艦発進する」

「了解。『相模』半速前進！」

「半速前進、宜候！」

『デ・ロイテル』を先頭に、輸送・支援艦船22隻、護衛艦12隻は土星圏を離脱していく。

——第7艦隊との会合ポイントまではおよそ3昼夜だ——。

——ミッドチルダ首都クラナガン・高町家——

「なのは、何があったの？」

ヴィヴィオを寝かしつけた後、フェイトは無二の親友に話しかけた。

デインギルへの武力制裁が決まったあたりから元気がなかったが、今日帰宅した時の表情は一段と沈んでいた。

ヴィヴィオが玄関に來た時は笑顔に変わったが、何か良くない事があったのは確実だった。

「うん……」

しばらく湯飲みのお茶に視線を落としていたのはだが、顔を上げて話し始める。

「今回のディンギル遠征部隊に、教導生と同僚の人達も何人かが参加することになったの」

「……え？」

魔導師は大気圏内、それも対流圏内での任務に限定されている。

成層圏での活動については専用のバリアジャケットの開発が端緒に
ついたばかりで、ましてや宇宙空間で活動できる目処はついていない。

ディンギル本土に降下するというのか？

それをなのはに問い質すと、

「私もそれが疑問で、本部に問い合わせただけど、降下任務が生じる可能性があるから、空戦魔導師も必要だと言うの」

「そんな。ディンギル軍には戦闘機もあるんだよ。

……宇宙戦闘機だけど、それなりの翼もついている。

コスモタイガー同様に大気圏内でも運用できるかも知れないのに！」

たとえばそうでなくても、防空戦闘機や対空ミサイルは必ず保有しているはずだ。

優秀な航空魔導師であれば、低空での格闘戦で互角に戦えるかも知れないが、ダイブ&ズームの一撃離脱戦法や地上からの対空砲射撃には抗しきれない。

ましてや、対空ミサイルに核弾頭が仕込まれていたら……。

フェイトはそれを指摘したが、なのはは

「私もそれを指摘して反対したけど、決定は覆らないって……」

と答えるや俯いてしまった。

よく見ると肩を震わせ、啜り泣いている。

「……いくら向こうのやっている事が悪いとは言っても、侵略紛いの行為に加担させるなんて……」

自分の教導は、世界の平和の守り手になってもらいたい一心でやっている。

こんな、侵略同然の行為に加担させられる上、生還が保証されない任務に送られる教え子や同僚達が余りに不憫だった――。

第202話『開幕』（前書き）

色々盛り過ぎたかも知れません……

第202話『開幕』

——シリウス星系、戦艦『マルス』、艦長公室——

大規模艦隊旗艦能力を持つ『マルス』のそれは、せいぜい分艦隊旗艦までの『相模』等とは段違いに広く、艦の規模も手伝って、ちょっとした会議室だ。

その部屋で、この艦と第7艦隊を預かる山南良介は参謀長・ジェイムス・モーリー以下の幕僚達と難しい顔を突き合わせていた。

第7艦隊はシリウス星系を中心にした訓練を行っている。

それも、有人艦のみならず、クレイモア級やダガー級自動戦闘艦の戦術機動訓練も並行して実施しているのだが——。

「小さなトラブルやアクシデントが多過ぎるな。放置しておけば、間違いなく大事故を誘発するぞ」

「そうですね……」

山南と幕僚達の表情は総じて渋い。

予想していたとはいえ、解決すべき問題が山積しているのだ。

自動艦もさりながら、新型艦であるアリゾナ級や海鳴級、旧白色彗星軍艦といった新顔。そしてそれらを運用する人員も、大半は経験が浅く、死傷事故こそ起きていないが、予想外の不具合やヒヤリハット事例があちこちで起きていた。

本来であれば、もっと時間をかけて訓練したいところなのだが、白色彗星帝国の報復や暗黒星団帝国の太陽系侵攻がいつあってもおかしくない現状では、実戦形式で、身体で覚えてもらうしかない。スパルタ形式だが、それでも各艦乗組員の士気が維持されているの

は幸いなことだろう。

「……士気が高いのは結構なことですが、かといってこのまま張り詰めさせ続けるわけにはいきましますまい。半舷休日は予定どおり与えるべきでしょう。補給隊も合流することですし」

第7艦隊の“総務部長”であるアリー・ハッサン事務監が乗組員の半舷休日を予定どおり取らせる事を進言する。

3日前に発った補給隊が間もなく合流する以上、物資の積込作業が優先される。

作業自体は補給隊側が行うので、各艦乗組員は休息することができよう。

「ん。半舷休日は予定どおり取らせよう。総員に通達」

「わかりました」

山南の決定を受け、アンドレイ・ロコフ首席参謀が手元の端末を操作。所属する全艦の艦長宛に通達を流した。

ほどなく、補給部隊の接近が艦橋から伝達され、ようやく司令部幕僚も表情を綻ばせた。

山南は執務机に戻ると、通信長を呼び出した。

「山南だ。『相模』の嶋津艦長に連絡。古代参謀に同行して私の元に来るように、とな」

——ミッドチルダ首都クラナガン、高町家——

フェイトは自分の書斎で姿見に相對していた。

身に着けているのは私服でも執務官制服でもなく、白いマントを纏った通常のバリアジャケツトだ。

フェイトはしばらく瞑目していたが、瞼を開き、鏡に映る自分を直視するや、一言呟く。

「――バルディッシュ、真・ソニックフォーム・セカンドバージョン」

『畏まりました。マスター』

――瞬転――

1秒もしない内にフェイトのコスチュームが変わった。

それは、管理局員や犯罪者達がよく見知っている二の腕や太腿が露わな、セクシーとも露出過多とも言われるコスチュームではなく、首から下、爪先や手首まで黒を基調に白と金のラインが入ったとボディースーツ型のコスチュームに包まれていた。

「――よしっ、コスチュームは完成だ」

フェイトは両拳を握り、小さなガッツポーズを作る。

執務官フェイトの真…もとい、新・ソニックフォームが姿を現した瞬間だ。

脚や二の腕をフルカバーしたことで防御力を増した一方、魔力制御の再設定で在来ソニックフォームとほぼ同等の機動力を確保し、バリアジャケツトとしての総合性能は格段に向上した。

新コスチュームのモチーフは、過日『ヤマト』に身を寄せていた時に貸与された女性乗組員用制服だった。

ボディスーツ様のそれは宇宙服や戦闘服としての機能を持ち、ヤマト唯一の女性乗組員だった森 雪は、その姿で幾度となく鉄火場を走り回り、負傷して倒れた古代進を庇ってデスラー総統とも対峙したという。

その話を聞いたフェイトは深く感銘を受け、自分も負けていられないと発奮したかどうかはともかく、その制服の高い実用性にも着目。自らのバリアジャケット改良のモデルに決め、マリエル・アテンザ、シヤリオ・フィニーノらと共同で作業を進めていたのだ。

——以来、フェイト・T・ハラオウンのバリアジャケットは“露出度”を下げ、新暦80年代初期のエキリプス事件以後は通常のバリアジャケットもスラックスタイプに転換したため、男性局員を落胆させた一方、女性局員からは凛々しさを増したと好評を博した。

そして犯罪者からは“金色の首狩女”と恐れられ、それを耳にした本人は痛く落ち込んだと言う——。

——『マルス』艦内——

「……」

「……」

先導する『マルス』副長のジョーニマス・福田に続きながら、古代守と嶋津冴子は鼻白んだ体で自動通路で艦長室に向かっていた。すれ違う乗組員が敬礼し、答礼を返しながら。

（『ゆきかぜ』はおろか、『ヤマト』と比べても段違いに広いな）
（『アンドロメダ』はまだツツコむ余地があったけど、こいつには

もうツッコむ気にならん……)

冴子が鼻白んだとおり、『マルス』の艦内スペースは広く、居住性も良さそうだ。

潜水艦並みの居住性しかなかったかつての乗艦『ゆきかぜ』『ひびき』等、M21881式突撃駆逐艦をドミトリーとすれば、『ヤマト』は民宿、ドレッドノート級はビジネスホテル、そして『マルス』はやや高級なシティホテルと言ったところか。

格納庫から通路とエレベーターで約5分余りで艦長室の前に立った。

「久しぶりだな、悪たれコンビ」

「お久しぶりです」

「……ご無沙汰しております」

山南と守、冴子が相対して話すのは、かれこれ宇宙戦士訓練学校を卒業してから12年ぶりだろうか。

当時、山南は守・真田・冴子らの1期下の主任教官で、彼から直接教わる機会はなかったが、しょっちゅう土方に呼び付けられては叱言と雷を喰らっていた冴子達の事は間近で見いていたため、互いに面識はあり、その流れで言葉を交わす機会が多かったのだ。

そんな古代達が、今や高級士官として司令部入りしたり、小艦隊を率いる立場になっている。

ガミラスや白色彗星との戦いで一番戦没率が高い世代ゆえ、武勲を挙げてなお生き延びた者は、自ずと指揮官職や教官職についてしまう。

それは今や古代 進ら20歳そこそこの者にも当てはまるのだが、目の前の2人はその中でもフロントランナー。当人達は全然望んで

いなくてもだ――。

「――奥方の体調はどうかね？」

「……率直に申し上げて、年は越せません」

「!……そうか……」

守の回答に、山南も声を落とす。

スターシャの容態が良くないことは軍の高級士官が皆知るところとなっているが、実は余命僅かなのを知るのは数える程の者しかおらず、山南も初めて知ったようで、一瞬絶句した。

しかし、次には守と冴子が絶句する番だった。

「――失礼します」

ドアが開き、女性クルーがお茶を持って来たのだが、彼女の顔を見た守と冴子は目を丸くした。

（――フェイト・T・ハラオウン?……いや、瞳の色が違うか）

（よく見ると、胸の大きさも違うな）

後者のセクハラ思考の主は言うまでもなく冴子だが、それほど、この女性クルーの容姿はフェイトに似ていたのだ。

違うのは胸の大きさ――フェイトは巨乳、目の前の彼女は美乳――と、瞳が紅ではなくヘイゼルであることだが、顔立ちや長い鮮やかな金髪はフェイトとよく似ていた。

（ドッペルゲンガーか……?）

些か呆然としていると、

「生活班副班長、アリシア・マルコーニです。お2人のお名前はかねがね……」

女性クルーの自己紹介を聞いて、冴子はまたも目を丸くした。

（何とまあ……名前までフェイトの姉ちゃんと同じかよ……）

フェイトのオリジナル、いや、姉に当たる故人と同じ名だ。魔法の世界とこつちがこうも似通っているとは……。

まあ、もう一つの地球も存在するというのだから、自分と鏡移しな人物がいても不思議ではないだろう。

冴子はそう結論づけて自分を納得させた。

——某宇宙空間——

天の川銀河から約15万光年離れた宇宙の海に、巨大な建造物が浮かんでいる。

その建造物——デザリアム帝国軍中間補給基地——の司令室に、太陽系制圧軍総司令官・カザン大將が陣取り、ある人物とのコンタクトが繋がるのを待っていた。

やがて、メインスクリーンが明るくなり、映し出された人物に、カザン以下、そこにいた者はひざまずいて臣下の礼をとった。

『——カザン、準備は予定どおり進んだようだね』

「はっ。聖総統のご威光あればこそでございます」

『いや、諸君はよく動いていたよ。私は少し動いただけさ……それ

より、あれの準備はできたかな？」

聖総統スカルダートはカザンと幕僚達を労ってから、今作戦の“目玉”の進捗状況を尋ねた。

「はっ、万事整いました。ご命令あれば、直ちに地球に向けて発射可能です。

幸いにも、太陽系で地球の外側にある各惑星の大部分は直列に並んでいます」

『そうか、ならば直ちに発射したまえ。作戦発動だ、カザン』

スカルダートは地球制圧作戦の発動を宣言する。

カザンは幕僚を振り返り、命令を下した。

「聖総統のご命令が下った。直ちに重核子爆弾を地球に向けて発射。続いて全艦隊は出撃する！」

「はっ！！」

二重銀河崩壊という、文字通り宇宙規模の極大災害を結果的に誘発し、地球連邦にとっても一大痛恨事になったデザリアム戦役が、ゆっくりと幕を開いた――。

第203話『出撃』（前書き）

運命の刻が迫っています……。。

第203話『出撃』

——時空管理局本局次元港——

本局音楽隊が奏でる『時空管理局に永久の栄光を』が響き渡る中、XX級次元航行艦『ルスラン』がゆっくりとバースから離れていく。見送る局員や家族の表情は悲喜こもごもだが、家族の大部分に笑顔はなかった。

「……………」

「……………」

見送る者の中にいるフェイト・シャリオ・ティアナにもまた笑顔はない。

彼女達の願いはただ一つ。クロノを初めとする乗組員達が一人でも多く生還してくること。

強硬派からは何たる弱腰かと言われそうだが、ディンギル帝国が白旗を上げるとは思えないからだ。

ディンギルがこちらに本格的攻勢をかけてくる様子は見られず、ならば先制してディンギル本星を叩こうというわけだが、ディンギル側には地の利がある上、艦船や機動兵器でもディンギル側のアドバンテージがある。

艦隊決戦に陥れば確実に不利な管理局側は、一目散にディンギルの首都を衝いてアルカンシェルを向け、可能な限り有利な条件で停戦交渉を行う。

その過程でディンギル国民が犠牲になるのもやむを得ない、という

ことだが――。

（これまでの経緯からして、ディンギル国民は管理局の事を知らされていないか、憎むべき侵略者と教え込まれているだろうな。そういうところにいきなりアルカンシエルを撃ち込めば、更なる敵愾心と憎悪を買うだけではないのか――？）

『クラウドディア』の艦長席で、クロノ・ハラオウンは物思いに耽っていた。

クロノ達に与えられた任務は、事実上の囷となってディンギル艦隊を挑発し、誘い出すこと。

極めて危険だが、うまくいけば本隊はディンギル本星を衝ける。ただ、クロノが何とも冷ややかな気持ちなのは、こちらに配置された艦の多くは、いわゆる慎重派や穏健派といわれる者が艦長であること。

（――目障りな連中を一網打尽に消してしまおうと言うわけか…）

余りに見え見えな配置といい、不本意極まる任務だが、自分は艦と乗組員に責任がある。そうやすやすと強硬派の思惑どおりに死んでやるつもりは毛頭ない。

何としてでも全員で本局に帰る。

クロノの頭に、勝利の文字は全く浮かんでいなかった――。

――本局、特別捜査官執務室――

「……苦労さんやったな。シグナム……」

「いえ。大した事はありません」

部屋の主たる八神はやては任務を終えて戻ってきた自らの守護騎士の1人、シグナムを労った。

大したことはない、と応じたシグナムだが、彼女が着ている航空武装隊の士官制服には卵のシミが複数付着しており、右頬にはやはり守護騎士であるシャルマルが絆創膏を貼り付けていた。

「大した事じゃなかよ！シグナムのせいじゃないってのに。逆恨みもいいとこだぜ。あのガキ！」

心外だと声を張り上げたのは彼女の融合騎で相棒たるアギトだ。

——シグナム達が赴いた第67管理世界は、約20年前、半ば強制的に管理世界に組み込まれた経緯があり、今なお反管理局意識が根強く残っているが、そこで発生した住民同士の小競り合いが拡大して現地駐在の管理局では手に余ったため、本局は武装隊を派遣。シグナムは自身が隊長である第241飛行隊とともに現地に赴いた。

管理局武装隊も加わったことで紛争は鎮圧されたが、治安維持のため一時駐屯したシグナム達は、現地住民からの冷たい視線に始終晒され、少なからず嫌がらせも受けた。

生卵や排泄物を投げつけられることもざらではなく、シグナムも子供から投石されて、右頬を負傷した。

当然ながらアギトや隊員は怒り、子供を拘束したのだが、シグナムは逮捕することを許さず、身元確認を済ませた後に釈放させた。

「治安維持に当たる以上、住民から煙たがられるのも給料の内さ。それに、あの子供らを逮捕して処罰したとて、根本的な解決にはな

らん。むしろ将来のテロリストを増やすだけだ。
あれで多少なりとも鬱積したものが発散されたのならば、この程度
の傷、怪我のうちには入らぬさ」

シグナムは淡々と語った。

「……問題なのは第67世界だけやない。比較的近年管理世界にな
った世界での反管理局運動がこの数ヶ月で増加しとる。

……ガトランチスやディンギル、地球連邦といった、管理局のコン
トロールが効かない世界の存在が微妙に影響しとるのかもなあ……」

だからこそ、そういう世界を叩いておきたいという強硬派の考えも
全く理解できないというわけではない。

もしも、ディンギルやガトランチスと反管理局組織が繋がり、強力
な質量兵器が流入したら、管理局の手には負えなくなってしまうか
らだというが――。

一方、地球連邦はディンギル等とは違うだろうが、万一管理局と激
しく対立するようなことになれば、何らかの牽制手段に出てくるこ
とはあり得る。

一番厄介なのは、反管理局感情が強い管理世界が地球連邦と正式な
外交関係を締結し、さらに軍事同盟関係になることだろう。

地球連邦の対外姿勢は対等かつ平和的に接する事を是としており、
管理局のそれとは必ずしも合わない。

ただ、侵略に対して全力で抵抗した結果、敵国の首都を壊滅させた
り、元首以下の国家指導者層を全滅させてしまったりと、事情を知
らない第三者からは過剰防衛としか思えない、不本意な形での結末
が続いていくのだが――。

（ディンギルと今すぐ和睦するのは不可能やろし、地球連邦まで敵に回すことだけは避けないかんよなあ…）

はやては内心で長嘆息をつくのだった。

——シリウス宙域、『マルス』士官室——

「では、何かありましたらお呼び下さい」

「ありがとう」

古代 守は部屋まで案内してきた生活班員を労うとドアを閉めた。

『ヤマト』『相模』のゲストルームですら、自分がかつて乗り組んでいた突撃駆逐艦より遥かに快適だったが、『マルス』のこれはさらに快適度が上がっていた。

戦略指揮戦艦は伊達ではない。

高官が乗り込む事を念頭に設計されているだけあり、占有面積や調度品の質も上がっている。

とはいえ、戦艦は戦ってなんぼだ。

ハードウェアは格段に改善されているが、山南曰く、樽も酒もまだまだ熟成不足とのこと。

気がついた事は忌憚なく言うように、と山南は話していた。

名目上は視察だが、山南に守を遊ばせておく気は毛頭ないようだ。

限られた時間の中でどれだけ出来るかわからないが、俺なりの事を

しようじゃないか――。

トランクから私物を出していく中、文庫本の間からフォトスタンドが出てきた。

内蔵電源を入れると、自分と妻子、弟、仲間達の姿が代わる代わる現れてきた。

画面の中のスターシャははかなげだが、まだ元気そうだった。

「……つ、スターシャ……」

間もなくスターシャはいなくなってしまう。

その現実を再認識した守の全身に震えが走る。

ガミラスとの戦争は守から沢山の大切なものを奪い去ったが、スターシャとサーシャという何物にも代え難い宝物を齎した。

そのスターシャが、もういなくなってしまう。

できるならば、仕事などうちやってスターシャの傍にいたい。

女王だったスターシャは私より公を優先する生き方だったし、自分もそうだ。

しかし――。

理性と感情が常に平行線にいるとは限らない。それが人間だ。

それは守も例外ではなかったが、全ての状況が激変する時が刻一刻と迫っていた。

第204話『侵入』（前書き）

いよいよ始まりました

第204話『侵入』

——天の川銀河・アンファ星系第3惑星、デイン
ギル——

『大總統閣下、国防長官より至急の連絡が入っております』
「繋げ」

總統府で政務を執っていたデインギルの国家元首、大神官大總統ル
ガールは、国防長官との通信回線を開かせる。

「何か？国防長官」

『はっ。潜伏中の《ユーフラテス》が、時空管理局本局から多数の
艦船が発進するのを確認しました』

「……目的地は我が本星か？」

『数日前から通信のやり取りが大幅に増えました事と、動員される
艦船の数が、管理世界における治安維持活動と比べても異常なまで
に多い事を併せて考えるに……』

「我が本星への直接攻撃の可能性が高いということだな？」

『御意』

国防長官からの報告を聞いたルガールは即断する。

「よろしい。全軍に防衛戦闘態勢を敷かせろ。

《ユーフラテス》には命令あるまで現在位置で待機させよ」

『御意！』

国防長官との通信を終えたルガールは、次いで長男を呼び出す。

「ド・ザール將軍、時空管理局が我が国に向かってくることになった。迎撃準備は良いか？」

『はっ。既に全艦隊に発進準備を命じました』

「ん、準備でき次第発進し、南極上空に集結させよ」

『はっ！』

さらに内務大臣には全土に戒厳令を敷くように指示。ルガールの命令一下、デインギル帝国は短時間で戦争体制に入った。

市街地に警報音が鳴り響く。

政府庁舎内で人員が目まぐるしく駆け回る中、ルガールは謹厳とも仮面ともつかぬ無表情を崩さぬまま呟く。

「……管理局よ、これは貴様達が仕掛けてきた事だ。血を流す覚悟がなかったとは言わせぬぞ」

呟き終えたルガールの口許は、微かに上がっていた――。

――太陽系外縁、第11番惑星軌道付近――

銀河系中央側空域に敷設されている無人監視衛星が、何の前触れもなく直近にワープアウトしてきた物体を捉えた。

その物体は亜光速で監視衛星をフライパスし、冥王星に向けて飛び去っていく。

衛星からの信号はタキオン通信で地球に向けて放たれ、それをキャッチした防衛軍司令本部と、進路上にある各基地や部隊は騒然となった。

司令長官室で執務に当たっていた藤堂平九郎はすぐさま中央司令部に降り、参謀長ら幕僚と共に現状報告を受ける。

「物体は光速の95%以上の速度で冥王星に向かっていています。あと10分で到達します！」

報告を受けた藤堂はスクリーンを見遣る。

そこには、水星から最外縁の準惑星エリス軌道や両極方面に展開している防衛軍の各戦力が表示されていた。

（…：天王星以外の惑星は、冥王星から火星までほぼ一直線に整列している。

誰の仕業なのかはともかく、太陽系の惑星が直列になることを見越した上で、あの物体を送り込んできたのではないのか？地球に向けて…：）

「火星以遠の全軍は戦闘配備！演習中の第6艦隊を呼び戻せ。それと、大統領官邸に通信を繋げ！」

老いたりとはいえ、彼もまた戦士だ。その本能が、これは侵略だと警告していた。

——最優秀すべきは市民の安全だ。過剰反応、独断専行と言われようが、我々は全てを賭けて市民を守る——。

藤堂にとって3度目の戦いが幕を開けた。

「ボヤボヤするな、急げっ！！」

傍らでは、右往左往する若いスタッフを参謀長が大喝した。

太陽系内の地球防衛軍は戦闘配備に入ったが、その最中に冥王星基地との通信が途絶した――。

――シリウス星系、戦艦『相模』――

「10時半の方角から10機接近！」

「面舵20！左舷対空射撃用意！」

「了解！」

「3時の方角から新たな編隊接近！」

「…遅いな。タイミングを見計らって横つ面をひっぱたく。艦首下げ30！右舷対空射撃用意！主砲3番を右95度！」

「はいっ！」

――同宙域、パトロール艦『水無瀬』――

パトロール艦を先頭に、2隻の巡洋艦が縦楔陣形を組んで突進する。

「『伊吹』と『鳥海』はついて来てますか！？」

「大丈夫。つかず離れずついて来てるわよ！」

僚艦を案じる操舵士の月読伊歩の問いに、艦長のナーシャ・カルチエンコは心配無用とばかりに応じ、伊歩は可憐な顔に獰猛な笑みを浮かべた。

何しろ、地球防衛艦隊で1・2を争う過激な操舵士と悪名高い自分の操る『水無瀬』から落伍せず、僚艦の『伊吹』『鳥海』はピタリ

と追従してくるのだ。

『鳥海』の舵を握るフランベルク・白百合・アリアは、ガミラス戦役当時からアクロバティックな舵捌きで知られていたが、『伊吹』を駆る綾歌麗奈も、たおやかな容姿と落ち着いた性格と対照的に、なかなかダイナミックな操艦を見せている。

「自動駆逐艦第1集団まで、あと12宇宙?！」

「全艦、全発射管と砲門スタンバイ！」

仮想敵である自動駆逐艦部隊との距離を聞いた副長兼戦闘班長の篠田 巖が、砲雷撃戦準備を下令した。

13TFの次席指揮官は『伊吹』艦長の塩江龍一だが、旗艦『相模』と別行動で高速機動戦を行う場合は『水無瀬』艦長のナーシャ・カルチェンコが指揮をとることになっている。

13TFの4人の艦長のうち、『水無瀬』のナーシャは突撃志向、『鳥海』のフランベルク・棗・シルヴィアはトリガーハッピー。指揮官たる嶋津冴子も元来は攻撃型である。

対して『伊吹』の塩江は守勢になると粘り強さを発揮するため、こういった突撃戦闘の際は後衛を受け持つのだ。

――さて、第7艦隊に合流した『相模』以下の13TF（独立第13戦隊）は、次の任地であるアルファ星系に出発するまでの数日間、第7艦隊の指揮下に編入され、周辺宙域の警戒や演習における“標的”任務にあたっていた。

もっとも、冴子以下の各艦長はそうそう簡単に命中弾をくれてやる積もりはなく、山南からも

「思う存分揉んでやれ」

と言質をとっていたため、何もかもが新しい第7艦隊の各艦や艦載機隊は“標的”によって徹底的に揉まれていたのだ。

“仏の山南”の課した演習という名の訓練はなかなか厳しく、地球防衛艦隊再建当初に土方総司令が課していた訓練とさほど変わらぬ苛烈さ。敵は待ってくれないという事で、抜き打ち訓練や17時間ぶっ通しの長時間演習も行われていたのだが、それでも事故による殉職者や重傷者が出ていないことは快挙といえた。

そして、この日の訓練演習もほぼ順調に進んでいたのだが、艦隊標準時間（東京時間）で14時過ぎに、旗艦『マルス』から突然、演習中止命令が発信された――。

第205話『制裁艦隊VSデインギル?』(前書き)

るよるよ、デスマッチの始まりです。

第205話『制裁艦隊VSディンギル?』

——ディンギル星赤道より約20万?宙域——

『クラウドディア』『ラットバルド』を含む管理局次元航行艦隊約200隻は、予定宙域に転移を完了した。

「艦内全システム異常なし」

「通信状況クリア」

「リーダー正常動作」

『クラウドディア』艦橋内に艦内外のチェック状況を報告するオペレーターの声が響く。

「よし、旗艦に報告してくれ」

艦長席のクロノ・ハラオウンは自艦の状況を旗艦に報告するよう指示した。

クロノ達が所属する第2艦隊はXV級とL級の後期艦に改L級といった高速艦で編成されている。

クロノ達の任務は迎撃に来るであろうディンギル艦隊を誘い出し、本隊のディンギル本星接近を支援することだ。

いわば囷だが、簡単にやられては敵の予先が本隊に向けられるため、敵艦隊に追いかけられながら“敗走”しなければならない難しい役どころだ。

当然、少なからぬ被害が生じることも考えられる。クロノは艦から

可燃物を下ろさせ、代わりに船外作業服を積み込んだ。

これとて気休めにしかないが、生身よりはずっとましだ。しかもバリアジャケット並の強度とABC対策もそれなりに施されているからだ。

強硬派の提督連からは嘲笑されたが、地球防衛艦隊とガトランチス艦隊の戦闘を目の当たりにしたクロノにすれば、これですら足りないのだ。

とにかく生き残る。こんな最低な任務で死ぬなど御免被る。

あのルガルが易々と我々の攻撃を許すはずがなく、悪質な、我々を絶望させるような陥穽を用意して手ぐすね引いて待っているに違いない。

その時――。

「前方10時の方向に、艦船の転移反応多数！」

観測担当オペレーターがクロノを振り返り報告した。

「デインギル艦隊か？」

「味方識別信号は出ていません！地球防衛軍の反応もありません！」

「ならばデインギル艦隊だ。総員戦闘配備につけ！艦内全隔壁を閉鎖せよ！！」

（とはいえ、どこまで持ちこたえられるのか……？）

帰還したフェイトが指摘したのは、管理局艦船の脆弱さだった。

特に艦内隔壁の少なさは、万一被弾した時に大量の空気が失われ、犠牲者を増やす原因になる。

また、艦の什器・備品に可燃物が多いのも問題で、艦船技術本部も、現在建造中の艦船については隔壁増設や什器備品の難不燃化を進めているが、肝心の艦自体の強化はやっと端緒についたばかりだ。

武装にしても、ガトランチスや地球防衛軍の艦船と比べて数世代は遅れていると見られ、最強の魔導砲たるアルカンシエルは射程と威力で波動砲に及ばず、その他の中小口径魔導砲にしても同様だ。何より、主機たる魔力炉が相対的に出力不足なのだ。

機関出力が小さければ航行能力が低く、戦闘時の機動性も低い。だからこそ艦隊決戦ではなく、直接敵国の首都を衝くという戦術も頷けるのだが……。

「大型艦10、中学艦約90。後方に超大型艦2!」

観測オペレーターからの報告を聞いたクロノは内心で渋面をつくる。

超大型艦——宇宙空母かあの核ミサイル艇の母艦なのか？

「超大型艦から機動兵器は発進しているか!？」

「いえ、確認されていません」

「ヤツ（超大型艦）の動向を見落とすな! 全砲門開け、障壁最大出力へ!」

双方の艦隊は急速に距離を詰めていく。

「第1・第2部隊、アルカンシエル発射態勢に入りました!」

通信オペレーターが叫ぶように報告する。

前衛の10隻がディンギル艦隊にアルカンシエルを浴びせかけよう

というのだ。

（発射を気取られなければ我々の勝ちだが……）

クロノはメインモニターに視線をやり、アルカンシエル発射シークエンスに入った旗艦『レゾリューション』以下のXV級を見遣る。

『レゾリューション』の艦首直前に発生した光球が急激に拡大していくが、それを見ていたクロノの表情が強い不安に歪んだ。

（……いかん。あれでは撃つぞと敵に言いふらしているようなものだ）

クロノの絶望に近い不安をよそに、発射シークエンスは最終段階に到った。

「アルカンシエル、撃ちますっ！」

「て、敵艦隊が一斉に散開しましたっ！」

通信と観測の両オペレーターが叫ぶように言った――。

第206話 『制裁艦隊VSデインギル?』 (前書き)

連続投下です。

第206話『制裁艦隊VSディンギル?』

「アルカンシエル、失敗しましたっ!」

多くの艦で同じ報告がなされた。驚愕とともに。

――前衛の艦から放たれたアルカンシエルは狙い過たず着弾したもの、機動性に勝るディンギル艦隊は発射直前に大半が散開して離脱。艦隊後方に位置し、離脱が遅れた数隻の支援艦艇が消滅したのみだった。

「……戦死した者には済まぬが、アルカンシエルとやらのデータもとれた。これで向こうの艦艇のデータは全て得た。

将兵達よ、管理の名の元に我が国を侵さんとする魔導師どもを宇宙の塵にするのだ!」

「全艦、砲撃開始っ!!」

第1艦隊旗艦『ガルンボルス』艦上でルガル・ド・ザールは司令官席から立ち上がり、将兵を鼓舞するように総攻撃を下令。傍らの参謀長が司令官の命令を伝達する。

総攻撃命令を受けたディンギル艦隊は管理局艦隊の両翼と上下方向に高速で展開し、主砲・副砲のガトリング・インパクト砲を連射し始めた。

「ディンギル艦隊、両翼と上下方向から撃ってきました!」

「障壁展開! 撃ち返せ!」

「無理です! こちらの射程外です!!」

「着弾しますっ!!」

管理局にとっては最悪の展開になった。ディンギル艦隊はこちらの中小口径魔導砲の射程外からでも撃ってくる。しかも上下左右からの十字砲火。

果たせるかな、被害が出始めた。

L級の『タツカー』が左舷からの砲撃で障壁を破られ、忽ち艦体に多数の破口を穿たれて爆発炎上したのを皮切りに、艦隊の外側に位置する艦から火の手が上がり始めた。

「『タツカー』シグナルロスト！」

「『カザルス』反応消失！！」

瞬く間に僚艦のシグナルが次々と消えていく様に、『クラウディア』のブリッジクルーは蒼白になっていく。

「本隊は何をしてやる！！」

クルーから怒り混じりの声が上がる。

こちらは命懸けで囀の役を演じているのだ。本隊が役目を果たさなければ、こちらは犬死にだ。

「本隊の状況は？」

「“今しばらく持ち堪えよ”とだけです」

早くも半泣き顔の通信オペレーターの報告を受けたクロノは、コンソールの下で拳に一層力を込めた。

ディンギルの首都を焼野原にしたとしても降伏する保証などない。むしろ憎悪にかられたディンギル軍の報復の的になるだけだ。

「――！！」

「……………」

――モニター中のイヤホンからは断末魔に瀕した僚艦クルーの悲鳴と叫びが聞こえてくる。クロノは無言で聴き入っていた。

彼の指示で艦隊内音声通信を録音している通信オペレーターは聞いていられなくなったか、俯き、インカムに添えた手を震わせている。

「……………」

クロノの心中は怒りを通り越して冷え冷えとしていた。

自宅がある海鳴で買い求めた“平家物語”の冒頭の一文が思い浮かぶ。

永久不変の物などあり得ない。それが大宇宙の真理。それは管理局も例外ではない――。

4割の艦が失われるか大破した頃、

「本隊、ディンギル星首都上空に転移！」

ようやく『ルスラン』以下の本隊が動いたようだ。

『クラウドディア』ブリッジ内にホツとした雰囲気が漂い始めたが、それもつかの間。

「ディンギル首都方向から超高エネルギー反応！」

「何！？」

クロノが我が耳を疑った時、メインスクリーンに青い光が閃き、急速に広がった。

首都上空には本隊がいる。

それ目掛けて撃ったというのか!?

「本隊はどうなっている!?!」

「一帯に極めて高いエネルギー反応! 計測できません!」

——ディンギルはこちらの戦略を看破していたのか——?

「解析急げ!」

本隊がやられてしまえば作戦の大前提が消滅する。

一刻も早く正確な状況を掴んで手を打たなければ、我々は犬死にだ!

その思いは旗艦『レゾリューション』も同じだった。

「本隊の反応はまだ確認できないのか!?!」

「まだ出ません!」

第2艦隊司令官を兼ねる艦長のレックス・アキノ少将は焦慮していた。

強硬派／拡大派に属する彼は、本部高官と総司令官からは、多少の被害は無視しても構わぬと言われていたが、もう過半数の戦力を失ったも同然だ。

世界拡張に消極な連中のみならず、同志の艦も続々と戦闘力を奪われ、スペースデブリと化している。

これで本隊がやられてしまったら、最早撤退しかないのだ。

「『コルディア』シグナルロスト！」

「おのれ……」

また同志の艦が失われた。

「提督、戦力の67%が失われました……」

観測オペレーターが強張った表情を向ける。

彼女だけではなく、他のクルーが向ける表情も大同小異。

こんなに犠牲を出した

もう撤退すべきだ。

私達はこんな所で死にたくない。

「……本隊との通信はまだか!？」

「まだ繋がりません……」

本隊は全滅したのではないか?

我々はまんまとディンギルの術中に嵌まったのではないのか……?

そんな予感がアキノの脳裏をよぎった直後。決定的な情報が齎された。

「……本隊、全艦シグナルロストですっ!!」

観測員が涙声で伝えてきた。

「……間違いないのか?」

「僚艦からも同様の報告が入っています」

「……」

「提督……」

唇を嚙むアキノの前に、副長のリサ・クングスホルム二等海佐が立った。

「……作戦は完全に失敗です。一刻も早く撤退を！」

本隊の全滅＝作戦失敗である以上、ここに留まることはただの無駄死に過ぎず、面子など何の意味もない。

（あの女狐達の言う通りだったか……）

非常に不愉快だが、リンディ・ハラOWNやレティ・ロウランが正しかったと認めざるを得ない。

「……残存全艦、直ちに空間転移でここを離脱せよ。座標は各艦に一任。幸運を祈る！」

統一した座標を計算する時間すら惜しいと判断したアキノは、残存艦に自由転移を命じ、続いて本局への打電を命じる。

「我が艦隊はディンギル帝国軍の罠に嵌まり、旗艦以下8割以上の戦力を喪失し全滅に瀕す。

これより残存艦は全て撤退すると打電しろ。添削は要らん」

「……わかりました」

通信主任はコンソールに向き直り、手早く通信文を作成して本局に向けて送信したが、その直後、右舷と直上からの十字砲火が『レゾリューション』のブリッジから機関部を直撃。同艦は大火球と化して消滅した――。

第206話『制裁艦隊VSディンギル?』（後書き）

冴子

「連続投下とは久しぶりだな。パー作者の癖に」

雪菜、熱爛の準備をしながら

「完全に躁状態ですね……」

ティアナ

「マジでアホ作者の反動が怖いわ……」

なのは

「あの……私の出番は？」

冴子

「ここの主役の私ですら出番がないのに、モブキャラに成り下がった魔王に出番が回ってくるわけなからう？」

「………」

目のハイライトが消えたなのは冴子にレイジングハートを向けようとしたが、掌には何もない。

「レイジングハート？」

ティアナ

「……雪菜、あんた何て命知らずな事してんのおおお!？」

雪菜

「……だいぶ消耗しているようでしたので」

引き攣ったティアナの視線の先には、熱爛酒に身を沈めたレイジン
グハートとピュアハートがいた。

『どうかな？酒加減は』

『Excellent！バルディッシュの気持ちが変わりました。
確かにこれは気持ちが良い！』

ティアナ

「あんた達も何やってんのオオオ！　なのはさん、現実逃避しないで
下さいイイ！！」

第207話『敗走クラウディア』（前書き）

クロノが奮闘します。

第207話『敗走クラウディア』

——時空管理局本局——

デインギル軍と戦闘に入るとの連絡が入ってからきっちり30分後、凶報が飛び込んで来た。

本隊は全滅。陽動役の第2部隊も大半を失い、残るは僅か2割というのだ。

報せを受けた“海”の高官達は蒼白になって立ち尽くす。

「どういふことだ、もう一度確認しろ！」

「総旗艦『ルスラン』に通信が繋がりません！」

「『レゾリューション』応答願います！……応答して下さい！！！」

「呼び出し続けろ、他の艦もだ！」

オペレーターは懸命に各艦に呼び掛けるが、応答してくる艦はごく僅かだ。既にやられてしまったのか、撤退することで精一杯なのか。せめて後者であってほしいのだが――。

そしてその報せは瞬く間に本局中に広がった。

「……！」

捜査の打ち合わせをしていたフェイト、シャリオ、ティアナは蒼白になり、フェイトは棒立ちになったまま、しばらく動かなかった。

リンディ・ハラOWN総務統括官は親友であるレティ・ロウラン人事統括官と打ち合わせ中だった。

彼女も第一報を聞くや、一瞬気が遠くなりかかったが、すぐに氣を取り直す。

しかし、様子を見ていたレティは打ち合わせを中止し、リンディに一休みするよう言い渡すと、足早で自室に戻った。

クロノが幼い頃、次元航行艦の艦長をしていた夫クライドを不慮の事故で失い、今度は息子の安否も危うくなったリンディの心中を、レティはよく知っていた。

一方、本局詰めのテレビ局や新聞、通信社等の記者は、行き交う局員の顔色が急に変わったのを見て取り、色めき立った。

編集部とやりとりする者、知り合いの局員を見つけて駆け寄る者等、思い思いのやり方で情報収集にかかるのだ。

「……明らかに怪しいな」

「ああ、何か大事なのは間違いないな」

日頃は競合関係にある記者同士が顔を突き合わせてはひそひそ話し込んだ。

彼らは知り合いの局員を見つけるや、何があったのか問い質すが、局員の口は固く、あるいはうまくかわされてしまうのだ。

苛立つ彼らの連名で、記者会見要請文が本局報道部に提出されたのはそれから間もなくのことだった――。

――クラウディア、ブリッジ――

「旗艦から撤退命令です！自由転移で離脱せよと！！」

「わかった。第8海上支部に向かう。各艦にも伝達してくれ」

クロノは指揮下にある『ラットバルド』以下3隻の艦にも同様の指示を下すが、クルーが疑問を呈した。

「本局には戻らないんですか!？」

『クラウディア』以下、クロノが率いる4隻は皆本局に艦籍があるから、当然本局に戻るのが筋だが――。

「……本局はディンギルに見張られている可能性がある。向こうの手に落ちた『ネストル』が潜んでいるかも知れないからな。一旦第8支部に寄港して様子を見る。本局にその旨も伝えるんだ」
「わかりました」

クロノの指示を受け、クルーは空間転移の準備を急ぐが、ディンギル艦隊のスピードはそれを上回り、『クラウディア』の周囲の艦からも火の手が上がり、その衝撃波は周囲の艦を揺さぶった。

「『カルマン』『タウロス』被弾!！」

すぐ近くで空間転移の準備に入っていたXV級『カルマン』に砲火が突き刺さり、中央部から火柱が上がった次の瞬間、大爆発の閃光と共に艦が両断。続け様の爆発でスペースデブリと化していく。

もう1隻のXV級『タウロス』も数発被弾し、ブリッジ付近に生じた破口から、海の制服姿の男女が次々と虚空に吐き出されていたかと思うと、第2波の砲撃で艦体をへし折られた。

凶報はさらに続く。

「――旗艦『レゾリューション』、反応消失しましたっ!」

撤退命令を出してから3分も経たずして旗艦もやられてしまった。そしてまた1隻、僚艦が宇宙の塵と化す。

その様を直視してしまったブリッジクルーから悲鳴が上がり、泣き出す女性クルーも出始めたが、

「うろたえるなっ!!」

艦長席で仁王立ちになったクロノの大喝が飛んだ。

「生還したら好きなだけ泣け!今は生き延びる事が最優先だ!手すきの者は何かに掴まるかシートベルトを確認するんだ。

ルキノ、転移までの時間は!？」

「あ、あと1分20秒です!」

普段の冷静さをかなぐり捨てた鬼の形相で指示を下すクロノに、ルキノ・リリエ副操舵士が気圧されながらも応えた。

「わかった。残り30秒でカウントダウン開始だ」

クロノはそれだけを指示すると、いつもの表情に戻って席についた。

(我々管理局は、こんな経験は初めてに等しいからな。泣き出したくなるのも無理もないか……)

本音を言えばクロノだって怖いが、艦長たる彼が諦めては助かる命も助からない。

何より、艦長自身が恐慌に陥るのは艦とクルーの命を縮める事に等しい。

(…あの人は、こんな戦いを何度もしてきたのか…?)

ふと、モニターを通して何度か会い、後には直接会って意見を交わした地球防衛軍の古代 守や嶋津冴子を思い出した。

彼らは圧倒的に優勢なガミラスやガトランチス艦隊相手に一步も退かず、敗北にもめげることなく戦い抜いて生き延びてきた。

—そうだ、どんな相手でも臆してはいけない。攻めの姿勢こそが道を開く—。

「1分前です!」

「総員対ショック防御!」

ルキノがコンソールを叩きながら告げ、続いてクロノが衝撃に備えるよう指示を出したが、その次の瞬間、スクリーンに閃光が走り、衝撃が『クラウディア』を襲った。

「被害確認、急げっ!!」

「本艦には被害ありません…被弾したのは『ラットバルド』です!!」

「何!?!」

愕然としたクロノの目の前には、炎に包まれ針路を外れていく『ラットバルド』の無残な艦影があった。

「くっ…、通信は繋がるか!?!」

「…音声ですが、スール艦長に繋がりました」

通信士はコンソールを叩いてクロノに回線を繋ぐ。

「スール艦長、状況を！」

クロノの呼び掛けに、ややあって雑音混じりながらスールの声が返ってきた。

『……ブリッジ近くに直撃弾。それと、生活ブロックまで撃ち抜かれました。艦内各所で……火災発生。ブリッジクルーは……私以外ダメになりました』

「……………」

ブリッジクルー全滅の報に、『クラウドディア』ブリッジは一瞬静まり返る。

そしてスールの声も苦しげだ。重傷を負ったであろう事は容易に想像できた。

『……ブリッジは全滅しましたが、艦内にはまだ生存者がいます。魔力炉はまだ稼働しますから、こちらは予定通り転移します。『クラウドディア』も予定通り行動して下さい』

「……………」

クロノは立ったまま俯き、唇を噛んで右の拳を握る。

『……クロノ。私はもう助からない。しかし、君は必ず生きて帰るなさい。』

……そして、こんな事を繰り返すことがないよう、管理局を頼む……

「……………」

スールの口調は、部下のそれから、“アバンおじさん”のそれに変

わり、言い終わるとともに回線は閉じられた。

「……30秒前です……」

カウントダウンを続けるルキノの声も震えている。

クロノは僅かな間俯いていたが、顔を上げるや『ラットバルド』に向けて挙手の札をとり、再び指示を下した。

「……本艦は予定通り転移する。予想外の衝撃があるかも知れん。何かに掴まっている!!」

「10，9，8……」

その時、艦が揺さぶられた。

「右舷に被弾!」

「人的被害なし!第17から24区画を閉鎖!」

「転移用意!」

この期に及んでは、多少の被害に右往左往してはいられない。

「……転移!」

右舷艦側から煙を引きながら、『クラウドディア』と僚艦『メリマック』『クラーモント』は次元空間へ転移していった――。

「……そうだ。それでいい……」

コンソールに半ば突っ伏しながら、改I級艦『ラットバルド』艦長、アバン・スールは『クラウドディア』の転移を見届けて微笑した。

大きな破片で腹を裂かれた自分もう助からない。

しかし、艦内には僅かながらも生存者がいる。

艦長として、最後までベストを尽くさなければならぬ。

出血多量のため意識が混濁し始め、指を動かすのも覚束ない。

「くっ……」

機能を停止し始めている脳と震える指を駆使し、何とか座標を入力したスールにもう力は残されておらず、床に倒れ伏す。

「艦長、やっとそちらに伺えます……」

スールが最期に口にした“艦長”は、果たして誰のことだったのか――？

第207話『敗走クラウディア』（後書き）

【退職したら何をしますか？】

なのは

「地球かミッドで余生を送ります」

はやて

「皆で大衆食堂でもしよかなあ…」

フェイト

「孤児院を開いてるかなあ…」

J・S

「ふふふ…。君達は今・最高評議会として老醜を晒すのがお似合いです」

ティアナ

（全否定できないわ…）

嶋津冴子

「天蚕てんさんの飼育と繁殖」

真田志郎

「小さな町工場で子供達のためになる発明」

古代 進

「世界中に木を植える」

雪菜

「皆さん、大真面目ですね。特に艦長は」

冴子

「私はいつでも真面目だが？」

雪菜・真田

「嘘ですね（だな）」

冴子

「orz」

リリカルトリオ（なのは・フェイト・はやて）

「天蚕って何ですか？」

冴子

「これさ」

親指大の緑色の芋虫を見せる。

リリカルトリオ

「キヤー（にゃあああ！！）」

冴子

「ふむ。娘っ子達には刺激が強過ぎたか。

しかし、見てくれはともかく、家蚕カイコよりいいシルクがとれるんだぞ
（↑本当です）

サーシャ

「20歳じゃ、とうに“娘”じゃないわよね？」

第208話『激震?』(前書き)

何とか離脱したクロノ達が向かった先は……。

第208話『激震?』

——第17管理世界『セピック』——

一口に管理世界といっても、ミッドチルダやヴァイゼンといった高度な文明世界もあれば、このセピックのように人口密度が低く、原生林や野生動物が広く棲息する世界もあり、自然環境保護や希少な動植物を密猟・密採取から守るために、時空管理局は自然保護官を常駐させている。

また、外部世界との出入りは原則として定期の次元貨客船が管理局の艦船に限られており、それも1回1隻と限られている。

それゆえ、一度に3隻もの大型艦が“停泊”し、しかも3隻とも損傷しているのは極めて異常な光景だった。

——『クラウディア』ブリッジ——

「提督、清水タンクの応急修理が終わりました。

『メリマック』『クラームント』も作業完了です」

「わかった。物資移送を始めてくれ」

「はい！」

通信主任に地上への連絡を指示したクロノは、ふうと息をつく。

デインギル武力制裁作戦は、藪蛇どころかとんでもない猛毒蛇に一方的に噛み殺される有様。

総戦力の8割以上を失った挙げ句、苛烈な追撃を受けながらの撤退で、亡父と母、そして自分の補佐役だった老練の艦乗りアバン・スールと『ラットバルド』を失い、『クラウディア』『メリマック』

『クラーモント』も少なからぬ損傷を被った。

幸いにも殉職・重傷者はいなかったが、清水タンクや食糧庫が中々大破してしまった。

食糧は艦同士で融通できるが、水の欠乏は乗組員の士気に悪影響を与えかねないと判断したクロノは、比較的近在にあった『セピック』に立ち寄って応急修理と水、食糧の補給を要請することとしたのだ。

『セピック』の地上本部長であるエリザベート・ボルジツヒが母リンドイの友人という個人的事情もあったが、エリザベートの快諾と、応急修理の完了がクロノをようやくひと安心させた。

転送ポートによる物資移送・搬入作業が始まるや、クロノは副長のロベルト二佐から、休憩するよう些か強く意見具申された。艦乗りとしてはクロノよりキャリアが長い彼からの進言であるため、それを受け入れて艦長室に引き揚げた。

「……」

とはいえ、一人きりになると、スールの最期の声が脳裏にフラッシュバックし、彼と『ラットバルド』を救えなかった事実打ちのめされる。

せめて、艦と生存者はどこかの管理世界か拠点近くに転移していてくれれば――。

スールは最期に、こちらにも転移すると明言した。

『ラットバルド』が生き長らえている可能性はあるのだ。

クロノは、それを信じる事で自分を奮い起こすことにした――。

その時、ブリッジから通信が入った。

「お休みのところ申し訳ありません。乗艦してきたエリオ・モンデリアル二士とキャロ・ル・ルシエ二士が面会を申し入れておりますが、どうなさいますか？」

「大丈夫だ。会おう、こちらに通してくれ」

義妹の被保護者であるあの2人がここに赴任していたことをすっかり忘れていた事に、思わず苦笑した。

確か12歳になっているんだったな。

2人とも、少しは背が伸びただろうか――？

――時空管理局本局――

次元空間に浮く巨大コロニーである本局は、過去に例を見ない沈鬱な空気に包まれていた。

管理局に敵対する専制国家であるディンギル帝国を管理世界に編入させる一貫として、強い反対を押し切って実施した武力制裁作戦が、ディンギルを降伏させるどころか、一方的な虐殺同然の戦闘で投入した艦船307隻の内、8割以上を失った上、撤退に入った艦船も苛烈な追撃に遭ったらしく、本局からの呼び掛けに応答があった艦は未だ30隻に満たない。

しかも大半が少なからぬダメージを受け、中には総員退艦に追い込まれて放棄された艦も複数出ていた。

「これでは次元世界拡張どころか現行管理世界の治安維持すら覚束

ないぞ!」

「フネはいずれ造り直せるが、乗組員はすぐには補充できんぞ!」

「事情が事情だ! 陸から人員を融通するしかないろう」

「そんな事ができるんですか! ? 陸はおろか、各世界も反対するに決まっている!」

「再建はともかく、どのように報道発表するんだ? 真実を発表すれば人心の動揺は免れないぞ」

「かと言って、これだけの夥しい犠牲だ。隠したところでいずればれるぞ。」

そうなったら管理局は本当に崩壊するぞ!」

「……………」

実りのない激論を交わす高官達の傍らで、管理局理事官でもある聖王教会騎士のカリム・グラシアも憂鬱さを隠せずにいた。

——これだけ大量の殉職者が出た以上、聖王教会にも騎士の派遣等、管理局から協力を要請されよう。

それ自体は構わないのだが、問題は、どれだけの規模になるのかと、聖王教会内部に、過激な主張をする者が出てきていることだ。

レアスキル“プロフェーテン・シュリフテン”を元に、かの機動六課創設に協力し、JS事件の短期鎮圧に貢献したことで教会とカリムの存在感は増した。

それ自体はいい。しかし、彼女が警戒するのは古きベルカの復興を主張する一派の存在だ。

今回の大敗は、管理局衰退の始まりとなる可能性がある。

それを機に、かつて消え去ったベルカ王国を再興し、管理局にとって代わるべきだと主張する者も出てきた。

しかも、象徴となるべき“聖王陛下”も存在する。管理局士官の養

女としてだが――。

……まあ、陛下こと高町ヴィヴィオ自身が望まない道を強制されれば、母親たるエースオブエースや一騎当千なその友人達が絶対許さないだろうが、彼らの動向にも目を光らせるべきだろう。

カリムの思考はそこまでだった。

「帰還する艦船を確認！

XV級『エクウス』『ベレンガリア』『セランディア』『レディア』です！

いずれも損傷していますが、航行に支障ありません！続いて……」

オペレーターが帰還しつつある残存艦の艦名を読み上げていく。

その艦名を耳にしてホッとした表情になる者、不安を隠せずにいる者と様々だったが、次の瞬間、蒼白になって立ち竦んだ。

「XV級『フライシャー』から緊急入電！！『ネストルの襲撃を受けている。来援を乞う』！以後応答ありません」

「XV級『ヴィクトリアス』からも入電！『ネストル』と交戦中！こちらも回線が切断されました！」「くそ！伏兵か……」

怒り混じりの呪詛が響くが、件の空域は本局から2時間以上を要する上、『ネストル』は火力、速力とも強化されているらしく、

「『ネストル』、急速離脱した模様です……」

あっという間に4隻に甚大なダメージを与えて遁走して行った。どうみても追撃は間に合わない。

「本局を前に4隻か……」

佐官の1人が悔しげに呟く。他の者も悔しさと憤怒を隠さなかったが、ほどなく更なる災厄が起きた――。

――デインギル星、帝国大總統府――

「父上、残存敵艦の掃討は完了しました」

「ん。お前は直ちにこちらに出仕せよ。緊急国防会議を行う」

「はっ!!」

艦隊司令官たる長男、ルガール・ド・ザールの報告を受け終えたルガール大神官大總統は、後継者たる息子に至急の出仕を命じて通信を閉じる。

「……………」

ルガールはしばし沈思黙考する。

時空管理局の侵攻部隊は完膚なきまでに叩きのめした。

彼らにはもはや管理世界の治安維持に最低限必要な戦力しかなく、暫くこちらに侵攻してくる事はできないだろう。

だが、それでいい。

我が国は鎖国体制であり、国防軍も基本的には国土防衛に適した編成と戦力だ。こちらから数多ある管理世界とやりに手を出していは出血戦を強いられることになりかねない。

管理局は、ハード面はともかく、人的絶対数では圧倒的だ。万一、被害を度外視した総力戦で来られれば、こちらも大流血だ。だからこそ、管理世界、つまり有人惑星には手を出していない。こちらへちよっかいを出す意欲と戦力を失わせれば、今回の戦闘の目的は果たしたようなものだ。

「さて、どうあしらったものかな……？」

古来、戦争は始めるより終わらせる方が難しい。大敗を喫した管理局がどう出てくるかが問題だ――。

第208話『激震?』（後書き）

ティアナ

「嶋津艦長達、どうしちゃったの？」

高町雪菜

「当分出番がないのでシエスタ中です」

なのは・フェイト

「あ、あははは……」

?????

「……ふむ、私が休んでいる間にすっかりだれ切ったようだな、こいつらは」

フェイト

「あの人は……？」

雪菜

「……艦長達が恐れる鬼教官殿です。この後の惨状は想像つきますので、後はお任せしましょう」

なのは・フェイト・ティアナ

「そ、そうだね（そうね）……（へーへ、）」

サーシャ

「雪菜ちゃん、鬼ね」

そう言いつつ、父とオジサマとオバサマに合掌すると、さっさとそ

の場を立ち去ったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7540v/>

或る戦艦と艦長 2

2011年11月13日18時12分発行